

幸田文「流れる」について

― 〈くろうと〉から〈くろうと〉へ―

本論文では、幸田文の「流れる」を取り上げ、登場人物の一人である梨花と、筆者である文の共通点と相違点をまとめ、〈くろうと〉の世界の分析を通して、最終的に梨花が〈くろうと〉の世界に入ることになった理由を考えた。

父である幸田露伴の死後、43歳で執筆活動を始めた文はこの作品で第13回芸術祭文化大臣賞、第3回新潮社文学賞を受賞した。文筆業から離れた時期に、文は知り合いの紹介で柳橋の芸者置屋「藤さがみ」で女中として働いていた。「流れる」がここでの経験を踏まえて書かれているということは、これまで度々指摘されてきた。

第一章では、文と梨花の共通点・相違点を、「流れる」本文と、現在確認できる資料をもとに確認した。今回見つけられたのは共通点が8点、相違点が4点であったが、実際はこれ以上にあると考えられる。文自身は小説のために芸者置屋で働いていたわけではないとしているが、実際に自らが住み込んで働いた場所を舞台にした小説を、自身の経験や過去を織り交ぜながら書いたために、そう言われるようになってしまったが、そのような書き方が作品に現実感を与えているのも事実である。過去の貧しさを回顧したり、看病のためにりんごを煮たらどうかと考えたりする場面など、日常の一部が感情と共に切り取られることで共感が生まれ、登場人物の思いに近づくことができる。また相違点があることで、梨花のイメージがより明確なものとなって際立ち、「流れる」という一つの作品が成立していると考えた。

第二章では、最終的に梨花が〈くろうと〉の世界に入った理由を、作品に描かれる〈くろうと〉と、梨花の能力を分析することを通して考えた。まず〈くろうと〉と呼ばれる人たちと梨花に共通していることは、「重さ」を感じさせる描写がされていることであることを確認した。梨花が注射を嫌がる不二子を自分の力で押さえる場面で、主人が梨花の忍耐強さ、最適な立ち回りを瞬時に察知して動ける力を認識し褒めたことが、結末の結果につながっているのではないかと考えた。また、「流れる」全体を通して、〈くろうと〉の美しさが描かれた直後に同じ人物の醜さ、汚さが描かれており、梨花が〈くろうと〉の世界の表だけでなく裏も見て学んでいる様子が分かる。さらに作品中には、最終的に梨花を引き抜くなんどりの勘の鋭さが描かれている箇所がある。なんどりは、「川の向う側」の格の高い店の老女将であり、そんな人物の勘の良さが描かれるこの場面は、それが〈くろうと〉の世界に必要な力であるということの暗示ではないかと考えた。実際に梨花も作品中で勘や予測を立てて当てており、これらのことから、必要なタイミングを逃さずに身体を動かす力、経験から培われた的確な判断力、先を見越して物事を考える力が評価され、梨花は〈くろうと〉の世界へ入っていったと考察した。

現代日本語における並列を表す助詞タリの研究

卒業論文で現代日本語における助詞タリを取り上げ、V1タリ V2タリに見られる並列の性質をもとに1項で現れるタリや後項のタリの脱落について考察を行った。

第1章では先行研究の概観および問題点を述べた。タリ並列は単にいくつかの動作を挙げる非対称的タリ形接続と対称的な動作・状態を取り上げる対称的なタリ形接続が存在し、またタリの持つ意味は一部列挙であるとされていた。しかし接続を分類するにあたり非対称と対称だけでなく類似型が見られ、接続が表す動作・状態という意味の面からも細分化が必要である。一部列挙の意味もタリ形接続の型からさらに詳しい説明ができる。

第2章では非対称・対称のそれぞれをタリ形と同様に V1 (形式) V2 (形式) で並列を表す他表現 (トカ、ナリ、テ形) と比較した。非対称的タリ形接続では同一事態・範囲から並列要素を取り出すことで事態・範囲そのものが意識されるため、並列された要素以外の存在の推測が容易だった。また表される事態における要素で、完了の場合は代表的なもの、未来の場合には行われる可能性が高いものや具体的に予想されるものが並列に表れやすかった。

対称的タリ形接続では、V1タリ V2タリスルの形で括って動作そのものに焦点を当てる動作性対称的並列と V1タリ V2タリダの形で括って動作が行われた状態に焦点を当てる状態性対称的接続という2種類が見られた。さらに状態を表すという働きから、類似する動作を並列することで1つの状態を指す派生の意味として状態性類似的タリ形接続が指摘できた。

第3章では1項で現れるタリとしてタリスル・タリダを取り上げた。タリスルでは状態を表すもので状態性タリ形接続に由来するものと非対称的タリ形接続に由来するものがあり、状態性由来では考えられ得る範囲の中で可能性が高いものを示す代表例示の意味がある。動作を表すものも動作性対称的接続に由来するものと非対称接続に由来するものがあり、動作性由来では対称的動作の片方を取り上げる注目の暗示の意味がある。さらに由来の接続が存在しないとき、具体的要素に対する背景があることを表す働き、状態の実在可能性の低さを表す働きがあることを示した。一方タリダは事態に対する状態の付随を表す形としてタリデが主に用いられ、タリシテとの相互の置き換えが可能であり、並列を作るタリスル (タリシテ) 形式と意味も共通する。

第4章では後項のタリが見られない V1 タリ V2 ϕ を検討し、後項のタリが脱落あるいは他表現と置き換わる現象を指摘した。タリの名詞句的性格を満たせる形式名詞への置換などがこれに当たる。

第5章で以上の考察を整理し、タリの持つ意味と接続の体系を改めて示した。タリは大きくは例示であるが、中でも動作か状態かで働きや共起関係が変わること、さらにタリそのものの帯びる状態性についても指摘することができた。

平仮名文の表記法研究 —大島本『源氏物語』桐壺巻における—

本稿は『源氏物語』を対象に、仮名字母による平仮名文の特徴を探ることを目的とする。小松(2006)では、『源氏物語』を含め、古典の仮名資料は、句読点も濁点もなく、可読性の低い文章であり、墨継ぎや連綿によって境界が標示されていると指摘している。また、斎藤(2021)では、「は」の用字傾向について、米国議会図書館蔵『源氏物語』写本を用いて論じているが、「者」「八」「盤」「波」との間に位置による使い分けは存在しないと結論づけている。それでは、当時の人はどのように『源氏物語』を読んできたのかという疑問を元に、字母による可読性が高められる行為があるのではと仮定し、『源氏物語』写本の中でも信憑性が高いとされる『大島本 源氏物語』桐壺巻を使用し、字母の実態を探っていく。

第一章では、濁音の平仮名表記について分析した。『新編日本古典文学全集』での記載が濁音のものを挙げ、その部分の字母を確認した。結果、濁音「ぎ」36例に関して、

「支」が24例、「幾」が9例、「起」が3例見られ、清音「き」に対しての使用数との違いが顕著に表れた。また、濁音「ず」72例に関して、「春」が40例、「寿」が31例、「ゝ」が1例見られ、「寿」では全用例45例の内、68.89%が濁音であることがわかった。ここから、「ぎ」と「ず」では濁音に対して有標的な文字が存在することを指摘した。

第二章では、「め」に「免」「女」の二つの字母が使われていることに対して使い分けがあるのか分析した。使用語、品詞、位置の3つの観点から分析し、「例」という単語に対し「太女之」が固定的に使用されていること、ク活用形容詞の単語には「女」のみが使用されていることを指摘し、それぞれの丁に対しての使用数に偏りが見られることから、使い分けの可能性を示した。

第三章では、「たまふ」に漢字と平仮名が使われることに対して使い分けがあるのか分析した。使用語、位置、敬意の方向、大きさの4つの観点から分析した結果、物語の中心人物に対する敬意の「たまふ」には漢字が使われやすいこと、「たまふ」は他の文字よりも大きく書かれていて、文章を読む際の目印になっていることを指摘した。

以上三章より、現在、墨継ぎや連綿のみで語句が標示されていると考えられ、可読性が低い文章と考えられている『源氏物語』について、字母によっても文章の境界が明示されているのではないかという可能性を指摘した。今後は、桐壺巻以外の巻、大島本以外の写本などからも同じような結果が得られるのか、検証していきたい。

寺山修司『田園に死す』論—〈破壊〉が暴く〈故郷〉への愛憎—

本論文では、寺山修司の第三歌集『田園に死す』の読解を行い、歌集内に描かれる〈故郷〉の姿を考察した。寺山文学の〈私性〉を突き止め、それを前提としつつ歌集内に展開される〈地獄〉や色彩語、〈母〉の表現に着目し、それらが描き出す〈故郷〉を問い直した。彼の芸術において〈故郷〉は永遠のテーマと呼ぶべき重要事項であったことが、特に〈故郷〉色の濃い『田園に死す』を研究対象とした主な動機である。

第一章では、『田園に死す』の基本情報の整理と先行研究の概観を行い、次章からの考察の参考とした。

第二章では、寺山文学の〈私性〉の内容を確認した後、歌集内の〈地獄〉、そして色彩語として見られる〈赤〉と〈青〉の役割と効果を考察した。〈作者≠作中主体〉の寺山文学における〈私性〉とは、作者＝作中主体というそれまでの歌壇の固定観念を否定するものであった。置かれた環境に依存する〈私〉すなわち〈無私〉の概念を提唱した寺山の思想を確認した。その後、歌集内における〈地獄〉の語が、その語を含んだ歌に閉塞感や異常性を付与しており、モチーフや歌全体の映像喚起をより劇的なものにしたと指摘した。またモチーフの固定観念が破壊されたことも示した。色彩語〈赤〉も同様で、その語と任意の語の二物衝突が起こることによって異様な情景を浮かび上がらせた。これは主体の〈故郷〉がまさに〈赤〉い血の滲むような苦しい場所であったことや、安住できない〈地獄〉の様相を呈していたことの表れであるとした。〈故郷〉に対する主体の思いは愛と憎しみの両面にあるとした。また色彩語〈青〉からは〈地獄〉でサバイブする主体の冷静さや諦念を感じられ〈地獄〉という環境を表現した〈赤〉とは対照的に、主体の人間性を強く浮かび上がらせる色彩語として機能していた。

第三章では、〈母〉について検討を行った。歌集内で〈母〉は主体によって敵対視され蔑ろにされているが〈母〉を恋うような歌もあったことから、主体の〈母〉への憎悪は〈母〉への愛がなければ成立し得ない類のものであるとした。この〈母〉への執着は〈故郷〉に対する愛憎と同一のものである。主体の幼い頃を司ってきた〈地獄〉の〈故郷〉にはいつも〈母〉の姿或いは面影があった。歌集に登場する〈母〉は〈亡き母〉として描かれるが、実際には寺山の母はつはこの頃まだ存命であること、存命の〈母〉を殺して〈亡き母〉とするところがこの作品における大きな虚構性の一つであることを指摘し、これこそ『田園に死す』の鬼気迫るような真実性を生みだした一因であるとした。〈地獄〉や色彩語の表現で〈故郷〉を血塗られた地獄へと変え、ついには〈母〉という最後の砦を破壊することでその虚構性が『田園に死す』をよりリアルな「記録」へと仕立て上げた結論した。〈故郷〉への愛憎は、様々な〈破壊〉によって完全に昇華されたとした。

Robert Louis Stevenson, *Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* 研究

本論文では、Robert Louis Stevenson(1850-1894)の *Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*(1886)において、Jekyll のもうひとつの人格である Hyde の描かれ方に焦点を当てた。二重人格を描いた本作において、Hyde の存在意義と、作中の登場人物及び読者にもたらされる影響に迫ることで、Stevenson が人間の二重性を表現した意義について論じた。

第1章では、登場人物の Hyde の捉え方、Hyde が彼らの心理と行動に与えた影響を読み解いた。人々が Hyde に感じる嫌悪と攻撃衝動は、身体的奇形を有し悪徳を重ねる彼を嫌悪すべき異質なものとして、自らと線引きするために発露した情動であると理解した。さらに Hyde が持つ英国紳士の側面は、線引きすべき存在の彼がヴィクトリア朝の人々に近しい性質を持つことにより、人々の中の嫌悪感を増大させる。そして彼の存在により人々は、悪の回顧と悪への好奇心に駆られ、己に内在する悪を見出すようになる。Hyde は特殊な悪魔ではなく、人間に内在する悪を一般化した存在として描かれていることを明らかにした。

第2章では、Hyde の言動を分析することで Jekyll の心理に迫り、Jekyll の潜在的な罪を導き出した。はじめは Hyde を受け入れていた Jekyll だったが、悪事に耽る Hyde を恐れるようになり、彼を自分の外の存在として遠ざける。自らが生み出した Hyde を都合よく解釈し、彼の罪から目を背け隠蔽する行為は Jekyll の罪として表出する。2人の変身は外から見える姿形を変えるだけで、内実は多様で矛盾した性質を持つ1人の人間であることを Jekyll は見誤っていたのである。Hyde という存在は、自身の恥辱を包み隠し、内側の真実に誤った認識と甘えを見せる人々に警告をもたらす悪魔として描かれていると考察した。

第3章では、Stevenson の生涯とヴィクトリア朝社会の気質が本作に投影されていることを指摘した。Stevenson は、本作の制作について、自身のもうひとつの人格の存在と二重生活が影響していると述べた。人間の二重性を主題とすることにより、英国社会が持つ上品な外面と退廃的な内実という乖離、信念よりも慣習を重んじてより優れたふりをし、不快なものを避けてきた偽善的なヴィクトリア朝の人々の罪を表現した。Hyde を葬り去るために Jekyll が自殺を選んだという本作の結末には、人間の心理と社会の中に渦巻く潜在的な偽善、そして偽善的社会から解放されることの不可能性が提示されていると読み解いた。

以上より、本作は人間の二重性を通じて、人が他人に見せる姿に収まらない実像を持つこと、自意識における甘えや驕りが身にもたらす破滅を描くと共に、偽善が蔓延る社会を批判的に表現する作品として大きな意義があると結論付けた。

『和泉式部日記』の研究―小舎人童の登場の意義―

卒業論文では、『和泉式部日記』の小舎人童に着目した。他作品との比較、他の家人たちとの比較、また、本文の描写という三点から、「女」と帥の宮の恋の過程を記すこの作品において二人の恋の仲介者として小舎人童が登場する意義を考察した。

第一章では、平安時代に小舎人童がどのような人物として活躍していたのか、また他の文使いや『和泉式部日記』に登場する他の家人たちについて考察した。第一節では、「小舎人童」についての辞典類の記述と、他作品(『うつほ物語』、『堤中納言物語』)における小舎人童の描かれ方を確認した。第二節では、平安文学における他の文使いたちの描かれ方と、『和泉式部日記』における小舎人童以外の家人の描かれ方を確認することで、他の家人たちが恋の仲介者として描かれる可能性を検討し、恋の仲介者として小舎人童が選ばれた理由を考えた。

第二章では、『和泉式部日記』における小舎人童について、三つの観点から登場の意義を考察した。第一節では、小舎人童の描写を順に挙げ、小舎人童の家人としての任務に着目して、作品全体を通して見える小舎人童の役割や登場の効果を考察した。その結果、(一)帥の宮と「女」の恋の仲介者としての役割、(二)帥の宮と「女」の恋を引きたてる効果、以上の二つを導き出した。第二節では、作品の中ほどに位置するいわゆる童遅延譚に着目して、この場面における小舎人童の働きが作品にどのような効果をもたらしているのか、他の場面と比較しながら考察した結果、童遅延譚における小舎人童の登場は、「物思い」の絶えない作品に、(三)「笑い」をもたらす効果、があるのではないかと考えた。第三節では、帥の宮と小舎人童の関係、「女」と小舎人童の関係、それぞれに着目して、小舎人童の成長譚としての作品の読み方を検討した。作品冒頭では、文使いという家人として未熟であった小舎人童が、帥の宮と「女」の恋の仲介の仕事を通して、帥の宮の夜の忍び訪問の連れ人となるまでに成長するというストーリーにも、作品を読んでいくうちに読者は気づくという、(四)『和泉式部日記』の新たな読み方というのが可能になるのではないかと考えた。第四節では、第一節、第三節で導き出した四つの小舎人童の登場の意義をまとめ、その四つが作品の中でどの程度重要な位置にあるのかそれぞれ整理した。その結果、(一)は作品の展開の上でかなり重要な位置にあり、(二)(三)(四)は、読者を意識したものであるという可能性があり、(一)に比べると作品における重要度では下の方に位置すると位置づけた。しかし、作者が小舎人童を作品の中で記したのは、読者を意識したためであり、(二)(三)(四)は、作品に様々な仕掛けを施し、読者をより楽しませる作品にしているという意味で意義のあるものだと結論付けた。

Paul Auster, *City of Glass* 研究
～街に起因するアイデンティティの消失～

“*City of Glass*”(1985) は、Paul Auster (1947-) の第二作目の小説であり、“*The New York Trilogy*” の第一作目である。本作は探偵小説であるが、謎が解決されないまま結末を迎えること、メタフィクションの要素を取り入れていることから、完璧な探偵小説ではなくポストモダン小説と言われている。本作を読んだときに、バベルの塔が取り上げられていることに疑問に思った。そこで、本論では、主人公 Daniel Quinn のアイデンティティに注目し、どのような特徴で、作中いかに変容して消失するのかを分析し、バベルの塔が Quinn のアイデンティティと関係づけられている否かについて論じた。

第一章では、Quinn が所持しているアイデンティティについて分析した。彼の中には Quinn の他に、ペンネームの Wilson、執筆している小説の主人公 Work が内在している。また、彼自身が自分の存在感を失くそうとする節があるため、彼のアイデンティティは揺らぎやすく、強固なものではない。

第二章では、ストーリーを追いながら Quinn のアイデンティティに変化が訪れている部分に着目して順に分析を行った。この物語は作家の Quinn のもとに間違い電話が来たことから私立探偵 Paul Auster として身分を偽って依頼を遂行する話である。新たに Auster としてのアイデンティティを得た Quinn がどのように思考し、行動しているのかを分析した。

第三章では、Quinn のアイデンティティの消失の様子を分析したうえで、小説全体の単語の使い方から、作品の描かれ方を分析した。本作では、街の様子を描く際に“brick”を多用し、煉瓦が多く使われた街であることを表していた。また、宗教的な単語も多用されていることがわかった。作中には新たなバベルの塔を建設することを夢見る老人が登場する。そのため、街が新たなバベルの塔の土台のように描かれていると読み取ることができる。また、この老人は街に落ちている物を拾って名付けるというアダムと同じような仕事をしていたことから街を楽園のように描いているとも解釈できる。

結論として、バベルの塔と Quinn のアイデンティティの間に関係性を見出すことができなかった。しかし、街を名前の無いもので溢れる楽園と解釈すると、Quinn のアイデンティティの揺らぎやすさが街全体に起因されているものであるということがわかった。

A Study of Preposition Stranding in English

本論文では、(1a)の英語における前置詞残留(preposition stranding)の非文法性は、前置詞句のフェーズ性と反局所性(anti-locality)の相互作用によるものであり、(1b)の文法性は名詞句を補語に持つ前置詞句の内部構造によるものであると提案する。

(1) a. *Who did John go home before he talked to? (McInnerney (2023:7))

b. Who are you waiting in line for? (McInnerney (2023:3))

van Riemsdijk (1978)は、前置詞残留は、ある主要部内の構成素が主要部外に外置するとき、その主要部の最大投射位置を経由しない場合に非文法的とする制約により前置詞残留を説明できる提唱した。英語では、wh 要素が前置詞句外に移動する際に前置詞の指定部を経由できることにより、この制約を回避することで前置詞残留の文法性が生じる。しかし、前置詞句の指定部内に wh 要素が現れる構造は、間接疑問文縮約特有の構造であるという問題点がある。

一方、Hornstein and Weinberg (1981)は、前置詞残留の文法性は前置詞句が動詞句に c 統御されるときに再分析を適用して、複合動詞を形成することにより説明できると分析した。再分析によって形成された複合動詞の補語である痕跡は格付与の規則によって対格が付与される。これにより、痕跡に斜格が付与されたときに非文法的と判断するフィルターを回避する。非文法性は、前置詞句が動詞句に c 統御されていない時に前置詞句の補語である痕跡に斜格が付与されることによるものである。

また、Law (2017)は、英語では前置詞と冠詞の編入が生じないことによって前置詞残留が生じ、(1a)の非文法性は、Huang (1982)の付加詞からの外置を禁止する条件によって生じると示した。再分析、前置詞と冠詞の編入による分析では、(1b)の付加詞である前置詞句から外置しているが文法的である前置詞残留の例を説明できないという問題点があった。

これに対して、McInnerney (2023)は、前置詞句と CP がフェーズである場合、CP を補語に持つ前置詞句において CP の構成素 XP が外置するには、フェーズの構成素はフェーズの指定部または主要部でなければフェーズ外に操作を行えないという Chomsky (2000)の条件によって(2)のような移動を強いられると仮定した。(2)の構造は、フェーズの構成要素が外置する際に、ほかの句を超えていないため、非文法的とする Zyman (2021)の反局所性により、非文法的と判断される。

(2) *_{[PP XP P_[CP XP C ... XP ...]]}



(McInnerney (2023:13))

(1a)の前置詞句は節を補語に持っているため、(2)のような移動を行い、非文法的である。

本論文は、McInnerney (2023)の仮定を採用し、(1b)のような名詞句を補語に持つ前置詞句は、(3)の下位構造 XP を持ち、前置詞句の指定部内に移動を行うと提案することで、前置詞残留の文法性を説明できると主張する。

(3) [_{PP} who [_P for] [_{XP} [_{DP} t]]]

(2)の構造では、冠詞句から前置詞句の指定部に wh 要素が移動する際に XP を超えて移動を行っているため、反局所性を回避することができ、文法的と判断される。

中国語における「親切さ」の表現について

本稿では、中国語で「親切さ」を形容する語として、“热情”、“热心”、“亲切”の三つを取り上げた。これらが定語、状語となる場合、そして名詞として用いられる場合にどのような語と結びつきやすいのか、述語となる時に「親切さ」の対象を何に定めているのかという点で研究し、使い分けを考察した。一章では研究の動機について述べ、二章では考察対象について触れた。三章では先行研究と研究方法を示した。三章一節では“热情”、“热心”、“亲切”が定語になる場合について考察し、三章二節では状語になる場合、三章三節では名詞として用いられる場合について研究した。四章では言及対象をもとに比較を行い、“热情”、“热心”、“亲切”が述語になる場合の違いを考察した。五章では、四章までのまとめと、“热情”、“热心”の形容詞としての特徴について、肯定的なイメージを持つ褒義語であるか、肯定的でも否定的でもない中立的な意味を持つ語であるかについて考察した。

本稿の結論として、“热情”、“热心”、“亲切”の使い分けは、これらのもともと持つ意味に大きく依存することが明らかとなった。“热情”は幅広く使うことができ、「親切さ」を表す時に困ったらこれを用いれば基本的に問題ないと言えるものである。また“热情”は“热心”、“亲切”に比べ、もてなしの意味を持つ動詞との相性が非常に良いことがわかった。さらに“热情”は“爱国热情”（愛国の情熱）などから見られるように、唯一名詞として用いられる様子が確認された。“热心”は人を助ける場面で用いることに適しており、真剣な姿勢という具体的な行動により、「親切である」ことを表現するものである。また“热心大哥”のように“热心”が直接人を指す名詞「親切なお兄さん」などの例文が頻出し、“热心”の特徴的な用法であることも明らかとなった。と結びつき、“亲切”は「親しみがある」という意味合いが強く、「親切である」こと形容するには“热情”、“热心”に劣るものの、受けた「親切さ」の中に「親しみやすさ」を感じたのであれば、“亲切”を用いるのが適当であると言える。また、“热情”、“热心”の形容詞としての特徴が肯定的イメージか否定的イメージであるかについては、“热心”は肯定でも否定でもない中立的な語であると考えられるが、“热情”に関しては肯定的なイメージを持つ語であるとの断定は難しいという結論に至った。

Jane Austen, *Pride and Prejudice* 研究

本論文では、Jane Austen(1775~1817)の代表作である *Pride and Prejudice*(1813)を題材とし、主人公 Elizabeth Bennet の結婚観や彼女の結婚を阻む要素を中心に作中の結婚の描かれ方を考察することによって、Jane Austen の結婚に対する考えの一端を明らかにした。

第1章では、Elizabeth 自身の結婚に対する考えが分かる発言や、周囲の人々の結婚に関する言動についての彼女の反応を中心に分析することで、Elizabeth の持っている結婚観や結婚の理想を解き明かした。Elizabeth は結婚相手が尊敬できる人間であるか否かを重視していることが明らかになったことに加え、相手の財産や立場などの外的要素を当人の人間性ほど重視していないということも論証した。

第2章では、Elizabeth が結婚相手に対して最重要視していない外的要素を、それぞれ Lady Catherine と Miss Bingley が象徴している可能性について論じた。この2人が作品内で与えられている役割や言動を具体的に精査すると、Lady Catherine と Miss Bingley はそれぞれ「身分の差」と「貧富の差」を象徴していることが分かった。

第3章では、「身分の差」と「貧富の差」をそれぞれ象徴する Lady Catherine と Miss Bingley が Elizabeth の結婚に与えた影響と、それが作品に与える意味について考察した。2人の Elizabeth の結婚に対する妨害が、結果として彼女の成婚を後押ししたという事実を、「風刺」と「喜劇」という2つの観点から読み解くことで、「身分の差」や「貧富の差」という障壁に対する Elizabeth と著者 Austen の冷笑的な姿勢を明らかにした。

「身分の差」や「貧富の差」を象徴する2人のキャラクターと Elizabeth の結婚との関わりを深く検討し直すことにより、結果として Austen の結婚観の一部を見出すことができたのである。

中世における人称詞の変遷について～平家物語における一人称代名詞について～

本論文では、話し手を指す一人称代名詞を収集基準に則って抽出し、『天草版平家物語』と『覚一本平家物語』の調査、比較を行う。近世以降の人称代名詞を複数対象とした研究、時代を超えて1つの人称代名詞を対象とした研究が存在する。本論文では、発話者単体を指す語であること、所有の助詞と接続していないこと、和歌に含まれていないことの3つの基準で一人称代名詞の用例を収集し、比較した。

第1章で『天草版平家物語』の代名詞の実態を確認し、以下の結果を得た。

「我(われ)」は身分、使用方法について、限定はみられなかった。「某(それがし)」は身分による限定はみられないが、対多数への口上に使用されることが多い。「私(わたくし)」は、「わ」は、身分が上の者に対して使用される。「余(よ)」は、『天草版平家物語』の序文で使用される。「妾(わらは)」は、使用者は女性に限定されるが、聞き手は限定されない。「拙者(せっしゃ)」は身分が下位の話し手からの会話で使用される。

同様に第2章で『覚一本平家物語』の代名詞の実態を確認した。

「我」「わ」は身分、使用方法について、限定はみられない。「妾」は、使用者は女性に限定されるが、聞き手は限定されない。「朕(ちん)」は、使用者が天皇や皇帝のみである。

これらを踏まえて、第3章で、比較を行うと、「某」「私」「余」「拙者」「朕」「妾」用例数について大幅な違いが見られた。その中で、使用方法に違いが見られたのは「妾」「私」「余」「朕」である。

「余」は、『覚一本平家物語』に用例が見られず、『天草版平家物語』の序文にのみ表れ、特有の語であることがいえる。一方で、「朕」は、『覚一本平家物語』に例文があるものの、『天草版平家物語』では用例が見られず、同様の場面も無い。これは、成立理由が教育のためであることと関係すると考えられる。本文の扉や秋元氏の『日本文章表現史 資料と解説』から、『天草版平家物語』の編纂目的がわかる。その中で、「朕」は、使用語彙として必要とされなかったことが、他の要因よりも大きく関係しているのではないかと考えられる。

最も特徴的な例として、「妾」は、変化していない例、「私」に変化した例、対応する箇所が存在しない例の3種に分かれた。変化は「妾」から「私」で起こり、話し手と聞き手は全く同じで、使用者による使い分けはないことが確認された。

以上のように、『平家物語』の中で使用される一人称代名詞の実態を明らかにした。今後の課題として、読み本などの、系統に分けた人称語の使用状況を調査し、比較・分析する必要がある。

本論文では、「日本語訳」と「言葉遊び」に焦点をあて、Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* を原文で読む意義について論じた。

第1章では、本作品の日本語訳の難しさについて論じた。本作品の日本語訳の難しさの理由は4つあることが明らかになった。1点目としては、たった1つの単語であっても、使われ方や話者がその言葉に対して持つイメージなども含めて日本語に訳すことが求められるため、日本語訳が難しいということである。2点目としては、本作品が児童文学であり、子供にもわかりやすい言葉を使わなければならないことである。3点目としては、日本語で使われているカタカナ語や英語は、日本語で使われている意味とは異なる訳し方が必要になること、4点目としては、言葉遊びが多く存在するが、英語で書かれている言葉遊びを反映できる日本語が存在しないことであるということが明らかになった。

第2章では、*Alice's Adventures in Wonderland* で多く登場するユーモアについて論じた。まずは、Carroll が本作に言葉遊びを多く登場させた意図について論じた。その意図は、子供たちに、勉強をして知識を得ることの楽しさを伝えるため、また、言葉の楽しさを、本を読む子供たちに伝えるため、そして、現実離れた世界観で言葉遊びを多く登場させることで、現実への風刺をするためだと考察した。このように、Carroll がユーモアを多く取り入れた理由を明確にすることで、言葉遊びや押韻、Alice の勘違いを理解することの重要性について論じた。その後、実際に本文に登場する言葉遊びを取り上げ、具体的な論証をおこなった。一部の訳者によっては日本語訳でも言葉遊びが反映できているものも存在したが、原文とまったく同じ言葉遊びを翻訳/翻案することは不可能であると確認した。

第3章では、本作品から読み取れるヴィクトリア朝時代のイギリス文化について論証し、これまでの議論を総括した。原文に登場する英単語1つをとってもイギリスの文化が反映されており、日本語訳を読んでいるだけでは見逃してしまう可能性が高いことを明らかにした。最後に、Carroll が本作を制作した意図は、当時女性や子供が強いられていた道徳や常識といった抑圧的な規範から解放したいという目的であったと考察した。その意図を表現するために、Carroll は階級意識を重視しすぎる人々への皮肉を表現したり、Alice が慣例や同調圧力に従うことなく、自身の感覚を重視し困難に立ち向かう姿や、ルールやしがらみに立ち向かう姿を描いたりしたと考えられるのである。このような Carroll の意図を読み取るためには、作品の深い理解が必要であり、原文で本作品を読むことは作品の理解に大きな意味をもつと考察した。

『源氏物語』論—続篇における「香り」表現と「闇」—

卒業論文では、光源氏亡き後の子孫たちの恋物語を描いた『源氏物語』続篇、特に「宇治十帖」における「香り」表現やそれに共起する語句に着目し、「香り」が漂う背景や作品世界に「香り」がもたらす効果、役割について考えることを目的とする。

第一章では、続篇を中心に、正篇と続篇における「香り」表現の特徴を比較検討した。

第一節では、「匂ひ」が人の内部から発散してくる美しさや内面的なものの表れを指し示す場合があることから、「香り」もまた、人の内面的な部分を表す可能性について指摘した。また、薫や匂宮、その他の「香り」を指す「香り」表現の用例を挙げると共に、共起する語を分類し「香り」に直接的な関わりを見出せないものとして、特に「雨」と

「闇」に関する共起語に着目した。「雨」に関する描写に見られた、雨・雪・霧・霞・涙などは、主体を隠すあるいは視界を遮る性質を持っており、さらに先行研究や『古今和歌集』の躬恒歌「闇はあやなし」を代表とする和歌等で「闇」との関連性が指摘されていることから「闇」に関する描写のひとつとした。よって、「闇」の描写は①目に見える

「闇」、②目に見えない「闇」、③主体を隠すもしくは視界を遮ることで形成される

「闇」の三種類とした。

第二節では、正篇と続篇の「香り」表現の差異を確認した。「薫物」や「たきしむ」、六種の薫物の具体的な名称のような、正篇に多く見られる人工的な薫物の「香り」は政治の道具として、あるいは教養の高さや家柄を誇示するための道具として機能しているとした。対して、続篇では道具としての機能を果たす「香り」がほとんど見られないのに加えて、暗闇の中で漂い、大君の死に際して漂い、専ら人や植物から漂う続篇の「香り」は、正篇との差別化を図ると同時に続篇における「香り」に独自性を与えていることを確認した。

第二章では、続篇における人々の「闇」について論じた。薫や匂宮は「香りを感じする人物」かつ「香りを放つ人物」として、その周辺に二人の心情の暗さを纏った「香り」を漂わせており、続篇に漂う「香り」は人々の心情を感知するとともに、心の闇を表現する役割を担っていると考えた。

このように、本稿では『源氏物語』続篇における「香り」表現とその背景を分析するに加えて、続篇における「香り」がどのような意味を持つのかについて詳しく考察した。多くの先行研究で続篇は正篇に対する「闇の世界」と述べられてきたが、「香り」表現が見られる場面における「闇」を中心に扱い、「闇」の背景に漂う「香り」の役割、また人の「闇」（心情の暗さ）に依拠する「香り」の意味について考えた。続篇において、「香り」は独自性を強め、人物の心情や各場面の雰囲気や豊かに表現しているといえる。

現代日本語の移動動詞による主体の移動と名詞形に現れる意味

主体の空間的な位置を変化させる動詞である移動動詞には、主体が空間的に移動しない意味を持つ場合があるほか、名詞形に動詞とは異なる意味が現れる例も存在する。本稿では移動動詞の中から「おちる」「さがる」「あがる」が用いられている例を「a.主体が空間的に移動する場合の用例」「b. 主体が空間的に移動しない場合の用例」「c.名詞形の用例」の3項目に分類した上で、同分類の各例の共通点や相違点を比較し、更に細かく分類することで、移動動詞の性質をより明確なものに近づけることを目的とする。

第1章では、移動動詞「おちる」が持つ意味の分類を行った先行研究である太田(2012)を取り上げ、移動動詞の意味は類義語や対義語を用いて上記のa~cの分類からさらに細かく6種に分類できることが明らかだと示した。しかし、移動動詞の名詞形に現れる意味については明らかになっていないため、ここに考察の余地があるとして第2章では、実際に各移動動詞と、その名詞形の分類と考察を行った。「おちる」の名詞形「おち」については第2章で取り扱うこととした。

第2章ではまず太田(2012)では触れられなかった「おちる」の名詞形「おち」が用いられる複合名詞の例について分類と考察を行った。ここでは主体が空間的に移動しないネガティブな変化を表現する例が多く挙げた。名詞形に関する考察と先行研究の検討から「おちる」は主体が空間的に移動しない用例を多く持つ移動動詞であり、落下のイメージからネガティブな変化が想起されやすいことがその背景にあるとした。

続いて「さがる」について、森山(2018)の分類を踏まえ、主体が空間的に移動する例、移動しない例、名詞形「さがり」が用いられる例について本稿の趣旨に合わせて分類と考察を行った。森山は名詞形については取り扱っていないため、名詞形はコーパスで例を集め、独自に分類と考察を行った。主体が空間的に移動する例では、空間的に下方向の移動のほか、後方への移動、南方への移動、相手の攻撃方向への移動といった「下」から連想される方向への様々な移動が表現されるという点で、空間的に下方向へ主体を移動させる点が共通する移動動詞「おちる」と明確に異なることが確認できた。また、コーパスを用いて収集した名詞形「さがり」が用いられる複合名詞は例の種類が非常に少なく、多種の例を持つ「おち」とは対照的になった。

この差が生まれた理由としては、「おちる」が持つ喪失の意味が「さがる」には無いため、喪失から連想されるネガティブな変化を「さがり」では表現できないためだと結論づけた。

「あがる」と対義する「さがる」を既に取り扱ったため、「あがる」については「さがる」と対義しない例を取り扱うこととした。「さがる」と同様、動詞は森山(2018)にさらなる分類と考察を加え、名詞形はコーパスで例を集めて分類と考察を行った。「さがる」に対義しない(主体が上方向に移動しない)が、空間的に移動はする「あがる」の用例は少ない一方、空間的に移動しない例は非常に多く挙げられ、表現する意味も様々だった。これは「あがる」が出現や完了の意味を持ち、これらの汎用性の高さに由来すると考えた。名詞形には動詞とは異なる意味が現れる例も散見され、「あがる」から想起されるイメージが多岐にわたることを確実なものとした。

以上、本論文では各移動動詞とそれらの名詞形が表現する意味の幅広さと、それに伴う用例数は大きく異なるが、それらすべてが主体の位置から数量、性質に至るまで変化させるということが明らかになった。よって、この「あらゆる主体の変化」が移動動詞の本質であるという結論に至った。

John Okada, *No-No Boy* 研究

—John Okada, *No-No Boy* におけるアイデンティティと愛国心—

本論文では、John Okada(1923-1971)の小説 *No-No Boy*(1957)を主な研究対象とした。第二次世界大戦中にアメリカで行われた強制収容によって危機に陥った主人公 Ichiro のアイデンティティ問題、アメリカへの愛国心の喪失に苦悩する Ichiro に注目し、これらのトラウマからの回復過程を考察した。

第1章では、日系アメリカ文学における *No-No Boy* の位置づけを行うために、文学史を概観し、その結果青年期に強制収容を経験した日系二世世代の文学活動が、日系アメリカ文学史における最大の転換であることが明らかになった。戦後になると多くの二世作家は当時の日系人の同化主義的風潮を認識するようになり、白人社会への迎合を目指す日系人を題材にした作品を出版する中、*No-No Boy* はその風潮から外れた人物を主人公にしたことで出版後十数年世間から無視された作品であった。

第2章では、Ichiro と二世社会、Ichiro と家族の関係性に注目して、それぞれの関係性が Ichiro に対しどのような影響を与えているのかを考察した。Ichiro と二世社会では、徴兵を拒否したことで“*No-No Boy*”と呼ばれ刑務所に収監されていた Ichiro が戦地へ向かった退役軍人の日系二世 Eto から罵られる本編冒頭の場面を示した。この場面の Ichiro の心情描写から、彼が退役軍人に対して劣等感を持っていることを指摘し、同じ日系二世でありながらそのコミュニティ内にもヒエラルキーが存在することを示した。加えて Ichiro の家庭は親子間、兄弟間で断絶があり、それが原因で Ichiro は自身のアメリカ的なアイデンティティを確立することが困難になっていることを示した。特に Ichiro と母親との関係がこの問題を深刻なものにしているとし、母親の存在がどのように Ichiro のアイデンティティ形成を阻んでいるかを考察した。そして、母親の自死を知った Ichiro の心情描写から、Ichiro のアイデンティティの問題は母親の死によって解決の兆しを見せることを示した。

第3章では、Ichiro の愛国心の回復という点を中心に、それを支えた日系二世や日系コミュニティ外の登場人物と Ichiro の関係を論じた。Ichiro に対し同情的な態度を示す退役軍人の Kenji や、Ichiro にアメリカの寛大な態度に目を向けさせる Emi、戦時中にアメリカが日系人にした行いを詫げる白人男性の Mr. Carrick の三者が Ichiro の愛国心の回復に際し重要な役割を持っていることが分かった。さらに、終末部分で Ichiro が退役軍人 Bull に対し手を差し伸べる場面から、Okada は Ichiro が本編冒頭で感じていた退役軍人に対する劣等感の消滅を示し、アメリカ社会における小さなヒエラルキー解体を描いた。

Ichiro のアイデンティティの問題は彼の母親の自死によって解決の兆しを見せた。また、Ichiro の愛国心の回復過程においては主に三名の人物が重要な役割を持っている。加えて終末部分の Bull に対して抱いた同情をきっかけにアメリカ社会にあいまいだが確実な希望を抱き、これが Ichiro の愛国心の回復において重要な経験であると結論付けた。

現代日本語における複合動詞のアスペクト的側面の一考察

本論文では日本語複合動詞の意味的分類のうち、語彙的複合動詞に属する複合動詞の実態について考察を行なった。第1章では従来の複合動詞の分類、この場合は影山（1993）における語彙的複合動詞と統語的複合動詞の意味的分類が妥当かどうかについて言及している。意味の観点から分類を行なう場合、グループごとの意味の境界が曖昧だったり、あるいはどの意味グループにも当てはまらない複合動詞が散見されることから、影山

（2013）に従って、複合動詞を「V1で、V2」に言い換えられるかどうかという形式面での分類を試みた。結論として、V1がV2を様々な意味関係で修飾し、V2が意味の中心を担うものを「主題関係複合動詞」、V2がアスペクトの役割としてV1の表す事象の展開について補足的に意味を付け加えるものを「アスペクト複合動詞」とし、語彙的複合動詞をさらに細かく分類する形に至った。

第2章では、先行研究として影山（2013）と長谷部（2013）を取り上げた。影山（2013）では、従来の語彙的複合動詞は意味的分類によって6種類に分けられていることを提示したうえで、その妥当性に異議を唱えている。たとえば、「抜け落ちる」という動詞は意味的分類において「抜けた結果、落ちる」という〈原因〉の意味にも捉えられるが、「抜けながら落ちる」という〈様態〉の意味にも解釈できる。また「花が咲き競う」と「花が咲き乱れる」という2つの動詞を比べた場合、「花が競って（競うように）咲く」と「花が乱れて（乱れるように）咲く」はどちらも〈副詞的關係〉の意味で言い換えが可能だが、〈補文関係〉の意味でとらえると「花が咲くことを競う」とは言えるのに対し、「*花が咲くことが乱れる」は言えないことが分かる。このことから、似たような動詞であっても意味の違いによる言い換えにばらつきがあるため、意味に依拠した分類の妥当性はあまり高くない。そのため、影山（2013）では、複合動詞の6種類ある意味分類を改め、V1とV2どちらが意味の中心を担うかという項関係に着目して「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」の2つに大別した。長谷部（2013）では、複合動詞の統語構造に着目し、語彙的複合動詞の中でも部分的に統語的複合動詞のような機能も認められる動詞を語彙的アスペクト複合動詞として位置づけ、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の間にある連続性・関連性について言及した。

第3章では、V2がアスペクトを表す「込む」を取り上げ、考察した。「込む」の実質的意味は「内部移動」に集約されるが、V2として現れ実質的意味が薄れるとV1の事象や様態を表すアスペクト的役割を担うようになることが分かった。たとえば、「人を家に連れ込む」の「込む」は人が移動する先が家という「内部」の意味や「家に」の二格に集約されていることから実質的意味を保持していると言える。一方、「具材を煮込む」だと具材が移動する「内部移動」の意味はなく、二格も持たないため、「込む」が「煮る」という行為の程度や様子を表すアスペクト的役割を果たしていることが分かる。

韓国ライトノベル『ミヤルのブランコ（鞦韆）』における キャラクターの構成要素について

韓国では1998年の日本大衆文化開放以降、日本の映画・音楽・漫画などに容易に触れることができるようになったが、日本のライトノベルもその中のひとつである。現在、韓国では多くの日本のライトノベルが韓国語に翻訳され読まれている。かつては翻訳がほとんどであったが、2007年に韓国人作家によってライトノベルが創作され始めた。著者オトゥスンによる『ミヤルのブランコ』は韓国語の同音異義語による言葉遊びや韓国的な素材を作品に取り入れ、典型的なライトノベルの形式に合わせて創作することで韓国のライトノベルの中でも高い評価を得た。本稿では、ライトノベルではキャラクターが重要視されることに着目し、そのキャラクターを構成する要素やライトノベルと他の媒体とのかかわりからライトノベルのあり方の違いを検討した。

第1章では、『ミヤルのブランコ』連作について概要を紹介するとともに、キャラクター設定において必要とされる要素や男性主人公と女性キャラクターとの関係性、キャラクターの類型について考察した。ライトノベルではキャラクターの名前や外見から、作者と読者の間でキャラクターの設定について共通理解を成立させることができる。女性キャラクターが主に活躍するストーリーや、設定の作りが細かい点は日本のライトノベルと共通しており、ライトノベルらしさが見られた。

第2章では、作品内で登場する韓国的な素材がどのようにストーリーやキャラクターに活用されているか、また韓国語らしい言葉遊びや口調がどのようにキャラクターに影響を与えているかについて考察した。語り物芸能の「鼈主簿伝（별주부전）」や「仮面劇（탈춤）」といった韓国的な素材は、古典そのままではなくひねりを加えて使われており、物語にもキャラクターにもうまく溶け込んでいる。また、同音異義語など、活字という媒体を活用した言葉遊びによって、日本語原作で韓国語に翻訳されたライトノベルでは味わうことのできなかった面白さを生み出している。

韓国のライトノベルは日本にほとんど紹介されておらず、市場規模として漫画化・アニメーション化・実写版などメディアミックスが容易ではないという点で日本との違いが見られた。とは言え、韓国のライトノベルは今後、より一層ジャンルが多様化し、読者層の幅が広がっていくことが考えられる。それとともに、現在でもライトノベルからウェブ小説への転換が見られるように、ライトノベルのあり方は変化し続けるだろう。

Charles Dickens, *A Christmas Carol* 研究

本論文では、Charles Dickens(1812-1870)の *A Christmas Carol*(1843)を取り上げ、周りに疎まれる存在として描かれる Scrooge が、最終的には改心を経て成長を遂げる過程を精査し、本作における「善い人間」とはなにかという問いを解き明かすべくテキストの分析をおこなった。

第1章では、Scrooge とその他の登場人物の性格について比較することで、改心をする以前の Scrooge が抱える問題点を示した。Scrooge の性格には、お金に対する強欲さ、孤独さ、薄情さが認められ、こうした性格から他者と心を通わせて祝うクリスマスを嫌悪していることが明らかになった。一方、Scrooge の甥の Fred、部下の Bob Cratchit、かつて勤めた店の店主 Fezziwig の3人の人間性を検証すると、彼らは Scrooge にはない寛大さ、人に幸せを与える力、お金よりも価値のあるものを大切にすることを持ち合わせていることが分かった。彼らと Scrooge との対比を通して、Scrooge には他者を重んじる気持ちが欠けていることが解明できた。

第2章では、過去・現在・未来それぞれの精霊が果たす役割と、精霊の狙いを考察した。また、Scrooge の変容についても分析した。過去の精霊は、Scrooge に少年時代の記憶やお金よりも大切なものの存在を想起させることを通して、Scrooge が「改心」を始めるためのきっかけを作ったといえる。現在の精霊は、貧しい人々に対する理解を深めること、誰もが尊い命の持ち主であることを認識させることにより、Scrooge の改心を促したと捉えた。未来の精霊の最大の意図は、今の行いが未来につながっているという当たり前に思える事実を、Scrooge 自身の「死」と結びつけることによって強く実感させることにあったと考察し、Scrooge が「改心」を「実行」に移すための役割を果たしたと分析した。こうした精霊の活躍から、Scrooge は改心を経て成長を遂げたと解釈した。

第3章では、本作が執筆された19世紀前半のイギリス社会の調査を通して、当時の状況と作中の描写との関連を分析した。また、イギリス社会に対する Dickens の主張についての考察も行った。調査の結果明らかになったのは、産業革命の裏に潜んだ労働者の悲惨な実情や、貧困が蔓延する社会の危うさであった。そして、そうした状況に対する Dickens の危機感が、鉱山労働や貧民窟、救貧院等の描写に表出していると読み解くことができた。

以上より、本作における「善い人間」とは、金銭や地位といった欲望にとらわれずに生活を営み、他者を重んじ、弱者に手を差し伸べることのできる人間であると結論付けた。

『枕草子』の研究―主家没落に関する記述の執筆意図―

卒業論文では、『枕草子』における「関白殿、二月二十一日に」章段全体の執筆意図と、三卷本系譜本における当章段の末尾の一文が書かれた意図について検討を行った。「関白殿、二月二十一日に」章段は貴人たちの優れた容貌や華やかな衣装についての描写が多く、中宮定子や藤原道隆を中心とした笑いに溢れた、明るい色調を持つ章段であるといえる。しかし、三卷本系譜本の中に、章段の雰囲気とそぐわない中関白家没落後の現状を悲嘆する一文が添えられている。また、『枕草子』全体を通して、このような中関白家の没落について語った表現はこの文以外に見られない。したがって、卒業論文はこの一文が書かれた意図について、章段の構成上適切な説を見出すことを目的としている。本文の各場面の分析により、当章段の執筆意図を明らかにすることで、三卷本系譜本の当章段の構成要素の一部である、末尾の一文の執筆意図が明らかになると仮定して、本文を五つの場面に分けてそれぞれの分析を行った。

第一章では道隆の美意識について考察を行った。後の栄華を象徴する桜が濡れしぼんだ際に、その朽ちた桜を撤去する藤原道隆の行動や、円居の場面において外見を重視する道隆の姿勢が書かれていることから、美しい外見を重視し、没落の気配を感じさせない場を構成する道隆の人物像を読み取ることができ、このような道隆の美意識の提示が当章段の執筆意図に関連すると予想立てた。

第二章では道隆の人物像について検討した。道隆の猿楽言や定子の身分を重んじる行動や、自身の宿世への自賛は栄華を重視し、没落の陰りの見られない場を構成しようとする意識に基づいているといえる。そのような道隆の考えや価値観の提示、それらに対する賛美が当章段の執筆意図であると考察した。また、道隆が宿世を自賛する場面は、作者が道隆の優れた宿世やその宿世に生まれた偉大さを称賛する意図で記されたと考察した。

第三章では「道隆薨去と中関白家没落」と題して、末尾の一文の執筆意図について考察した。三卷本末尾の一文には、栄華を誇示し、凋落の姿を隠す道隆が失われたことで一族は没落してしまったという嘆きや、道隆への賞賛、追悼の念が示されていると考えた。したがって章段の雰囲気とそぐわない三卷本「関白殿、二月二十一日に」段末尾の一文は、道隆の人物像を伝える各場面を踏まえて道隆賛美を述べるものであるとの結論に至った。敢えて凋落を想起させるこの一文を書くことで、道隆が栄華の場面を作りあげた第一人者であることを読み手に伝えているのだと考察した。

以上の考察を通して、『枕草子』に暗い政治的背景が殆ど示されないのは、凋落の姿を隠そうとする藤原道隆の意識に清少納言が影響を受けたためであり、中関白家の没落が唯一示された一文には、道隆への賛美や追悼の念が込められていると結論付けた。

ドイツ語分離動詞の形式的・意味的諸側面 —名詞由来の分離前綴り、分離・非分離前綴りの分析を中心に—

本論文は、名詞由来の分離前綴りや分離・非分離前綴りを持つ分離動詞を主な分析対象としながら、これらの分離前綴りの特徴や分離動詞全体に共通する基礎動詞の特徴を形式と意味の両側面から明らかにしたものである。

第1章では、ドイツ語の分離動詞について概観するとともに、分離動詞の定義や本論文で取り扱う分離動詞の種類について確認した。

第2章では、名詞由来の分離前綴りを持つ分離動詞を具体例に、これらの分離動詞が持つ形式的・意味的特徴について論じた。2.1節では、「語彙的接辞」に関連する先行研究である宮岡 (1992)、Nojima (1996)、野島 (2023a)、永山 (2021) を取り上げ、「語彙的接辞」の定義の曖昧さや用語表記のゆれといった問題点を指摘するとともに、本論文における「語彙的接辞」の定義を設定した。2.2節では、先行研究における「語彙的接辞」と名詞由来の分離前綴りの共通点、またその形式的・意味的特徴についても詳細に議論を行った。共通点について、分離前綴りが1音節または2音節である点、基礎動詞の自動詞主語 (S) や他動詞目的語 (P) として解釈が可能である点を明らかにした。また形式的・意味的特徴について、具体的には①基礎動詞が対格を取る動詞か方向を表す句と共起する動詞のいずれかに該当すること、②分離動詞全体の意味が分離前綴りと基礎動詞の単純な意味の足し算にならないことの2点を示した。特に②について、名詞由来の分離前綴りを持つ分離動詞は分離前綴りと基礎動詞の意味の両方が分離動詞全体の意味に反映されない「Aタイプ」と、分離前綴りと基礎動詞の意味のうち、いずれか一方または両方が分離動詞全体の意味に反映される「Bタイプ」に分類可能である点を指摘した。またAタイプは用例数が少なく、該当する分離前綴りの生産性が低い点、Bタイプは用例数が多く、該当する分離前綴りの生産性が高い点も指摘した。そして、分離前綴りの生産性の高低が分離動詞全体の意味の反映に関わっている点についても指摘を行った。

第3章では、分離・非分離前綴りを持つ分離動詞を具体例としながら、これらの分離動詞が持つ形式的・意味的特徴について論じた。3.1節ではドイツ語文法における分離・非分離前綴りの特徴とその説明の問題点についてヘルビヒ・ブッシュャ (1982)、中山 (2007)、清野 (2008)、橋本 (1984) を参考にまとめるとともに、分離・非分離前綴り *durch*、*über*、*um*、*unter* について詳細な議論を行う成田 (2003) を概観した。ドイツ語文法における分離・非分離前綴りの特徴について、基礎動詞の意味と前綴りのアクセントが密接な関わりを持つ点や前綴りの意味が分離動詞全体の意味の決定に大きく関わる点を確認した。また問題点について、ドイツ語文法における分離・非分離前綴りの説明は意味の側面に偏った説明が多い点を指摘した。3.2節では分離・非分離前綴りを持つ分離動詞が持つ形式的・意味的特徴について議論を行った。その結果、第2章で分析を行った名詞由来の分離前綴りを持つ分離動詞と同様に、①基礎動詞が対格を取る動詞または方向を表す句と共起する動詞のいずれかに該当する点や、②動詞全体の意味が前綴りと基礎動詞の単純な意味の足し算にならない点の2点が明らかになった。また①の特徴が、不変化詞や形容詞を分離前綴りとして持つ分離動詞にも適用し得る点についても言及した。

現代日本語における動詞畳語を類型化する

本論文では、現代日本語における動詞畳語を類型化することを目的として分析、分類を行った。畳語とは「山々」のように語や語の一部を繰り返してできた語であり、動詞畳語は「懲り懲り」のように動詞を重ねて作られた畳語を指す。先行研究において動詞畳語は主に連用形が重複して副詞となると述べられており、動詞畳語が名詞や形容詞として使用される場合についてはわずかに言及される程度であった。現在は動詞畳語の使用が拡大しており名詞や形容詞として使用される用例が多く集められるのではないかと推測したため、用例を収集し分析することで改めて動詞畳語を類型化することを試みた。本論文ではコーパスやブログ、X（旧 Twitter）、商品名などから合計で約160個の用例を収集し、それらを動詞の活用形や文法的機能、語構成ごとに分けて分析を行った。

結論として、本論文では動詞畳語を6つに類型化することができた。それぞれを〈連用修飾タイプ〉〈名詞化タイプ〉〈形容詞化タイプ〉〈連体修飾タイプ〉〈動詞化タイプ〉〈形容動詞化タイプ〉とした。〈連用修飾タイプ〉は「ますます人気が出る」「知らず知らず覚えた」のように畳語が副詞となるものと、「涙を堪え堪え歩いていく」「池の水が満ち満ちている」のように畳語が述語となり副詞句を作るものがある。〈名詞化タイプ〉は「こいこい」「ふりふりポテト」のような名詞になるものである。〈形容詞化タイプ〉は「晴れ晴れしい」「馴れ馴れしい」のように重複部に「しい」を伴い形容詞となるものである。〈連体修飾タイプ〉は「次々の来客」のように重複部が「の」を伴い連体修飾するものである。〈動詞化タイプ〉は「のびのびする」「惚れ惚れする」のように「する」を伴い動詞となるものである。〈形容動詞化タイプ〉は「飛び飛びな」「切れぎれな」のように形容動詞となるものである。

以上の分類に至るまでに、動詞畳語の特徴について様々な考察を行った。動詞畳語は重複部に接尾辞や助詞、形式動詞を伴うことで文法的機能が付加され、副詞だけでなく形容詞や形容動詞、動詞などにカテゴリー変換を起こす。先行研究においては「に」「と」「て」「しい」が重複部に伴うことがあると述べられていたが、これらの接尾辞に加えて接続助詞「て」、打消しの助詞「ず」、形式動詞「する」を伴うものがあることが分かった。それらの接辞を含めて一語と見なせる場合があることについても論じた。一方で名詞化タイプは重複部単独でカテゴリー変換をすることができ、動詞の活用形の種類が多いことや生産性が高いことも相まって連用修飾タイプに次ぐものであると論じた。

先行研究において動詞畳語は〈反復・継続〉〈様子〉を意味すると述べられてきた。本論文では、6類型の大半の畳語は意味を分化させ〈様子〉を意味するが、述語として用いられる場合は動詞性を失わずに〈反復・継続〉を意味すると結論付けた。重複する語自体が持つ意味や、重複部に伴う形式が持つ文法的機能が影響することで〈複数〉や〈強調〉を意味することもあると分析した。

畳語は語が繰り返されるという性質上「キラキラ」のようなオノマトペと通じるところがあり、動詞畳語が擬態語のように働く現象を確認した。それは主に「刈る刈るモア」のような商品名や、「にぎにぎ」のような幼児語に多く見られた。

A. A. Milne, *Winnie-the-Pooh*, *The House at Pooh Corner* 研究

本論文では、Pooh 物語の登場人物の性格や関係性および文化を明らかにしながら、Alan Alexander Milne が本作に込めた息子 Christopher Milne に望んだものについて論じた。また、Alan の自伝に基づく彼の過去や幼少期の体験にも触れながら、Alan の真意を考察した。

第1章では、Christopher Robin、Pooh、Piglet、Eeyore の性格について分析した。Pooh は子どもらしく自信に溢れ、自己中心的な姿が多く見られるものの、自信がなくなり自らを卑下する場面も存在する。一方で Piglet は優しく仲間思いであるものの、臆病な姿が目立つ。利他的すぎる故に不利益を被ることがあるが、Pooh により Piglet は助けられている。Christopher Robin は知識が豊富で難問を解決する英雄的な人物として存在する。周囲からの信頼も厚い一方で、知識の欠如により間違いを犯す様子も見られ、その不完全さに読者は親近感を抱く。Eeyore はネガティブで皮肉屋である。人付き合いも受け身で、友好的ではない。しかし、指摘されたことに応じる素直な一面も見られる。

第2章では、第1章で明らかになったキャラクターたちの性格や特徴を基に、彼らの関係性を考察した。Eeyore はネガティブで不憫な状況に陥る姿が多く描かれるが、窮地の Eeyore を助けようと仲間たちの協力的態度が助長されている。また Eeyore は知識面・精神面において尊敬する Christopher Robin から学びを得、仲間と共に協力的な行動を起こすことができている。Christopher Robin によって、Eeyore は百町森に溶け込むことができているのである。また、Pooh と Piglet の比較から、百町森の平等性を考察した。百町森では身体の大小や個性、特異によって差別されることはなく、皆平等な世界が作られている。そして、この設定には Alan の兄 Ken の存在が影響していることが分かった。また、Christopher Robin は Pooh が成長できる環境を作ることによって Pooh の可能性を広げ、また Pooh の危機を救い、愛情をもって Pooh に接している。以上から、Alan は Christopher Robin を親、Pooh を子どもとして、その関係性を設定したと考えられるのである。

第3章では、百町森における教育について論じた。Alan は子どもが学齢期に突入する運命と教育の必要性を物語に反映させたが、教育の絶対優位性を否定する記述も見られる。教育のない者も活躍できる世界を物語に実現させた。また、Christopher Robin に父親の、Pooh たちに子どもの理想像が反映されていると解釈し、Alan が抱く父親および子どもの理想像について論じた。Alan は家族に尽くした父親 J. V. Milne に憧れを抱き、J. V. Milne のような父親像を Christopher Robin に反映させた。子どもの理想像に関して、Alan が Christopher Milne に望んでいた子ども像と、実際に Christopher Milne が作品を通して感じた姿に相違があることが分かった。Christopher Milne は作中の英雄 Christopher Robin にはなれない自分に劣等感を抱いていた。対して Alan は、Christopher Robin 以外の Pooh を中心とした動物たちに子どもの理想像を重ねることで、動物が見せる純粋で無邪気な姿を Christopher Milne に望んだと結論づけた。

Margaret Mitchell, *Gone With the Wind* 研究

本論文では Margaret Mitchell (1900-1949) による *Gone With the Wind* の小説とそれを原作として制作された映画について、人種差別的描写に焦点を当て分析を行なった。2020年に全米に発展した Black Lives Matter 運動の影響を受けて本作品も批判対象になったことから、批判の対象となる要素を見つけ出し、現代も存在する人種差別問題に対する向き合い方を導き出すことが本論の目的である。

第1章では、小説と映画における黒人奴隷たちの描かれ方や、彼らに対する待遇を比較し、原作が映画化されるにあたって「影」と化した部分を探った。特に黒人奴隷に対する呼称や言動に着目し、原作の小説では “Darky” や “Nigger” といった差別用語が頻出することや、黒人奴隷に対する侮辱的発言を含む原作の場面が映画では省略されて、「影」と化していることがわかった。

第2章では、物語の中心となる Scarlett に「光」が当てられ、彼女の内面的な強さや天真爛漫な性格が強調されている部分を、原作と映画の比較をしながら探った。映画には、彼女の大胆さ、強さ、粘り強さがはっきりと伝わってくる場面が随所に散りばめられ、その中には彼女の大胆不敵な性格がより明確になるよう、原作の内容が変更された場面もあることがわかった。

第3章では、作品の舞台となった当時のアメリカ合衆国南部における Mitchell の黒人観について分析を行なった。彼女の黒人観は当時の白人コミュニティではマジョリティーの意見であり、黒人奴隷に対する呼称についても、現代とは捉え方が異なっていたことがわかった。

第4章では、映画版 *Gone With the Wind* が Black Lives Matter 運動の影響を受け、米国で配信が一時停止になった問題を取り上げ、本作品を通して垣間見える現代社会の人種差別問題に対する認識や、作品の「影」の部分にも知識を持って正面から向き合うことの必要性を明らかにした。

結論として、本作品が映画化されるにあたって、小説で用いられる人種差別的表現が省略された「影」の部分と、戦禍で逞しく生きていく Scarlett と彼女を取り巻くロマンス物語という印象が強く押し出された「光」の部分が存在していることがわかった。奴隷制の残酷な現実を一部「影」として描かず、Scarlett という人物の生き様に「光」を当て、人種差別が存在する世界を古き良き時代として描いたことが、この作品が批判の対象となった大きな要因の一つであるという結論に至った。

現代日本語の複合語短縮において前・後部要素が1モーラに短縮される例と分析

本論では、現代日本語において複合語の前・後部要素が1モーラに短縮される例を「前・後部要素1モーラ複合語短縮」と呼称し、用例を集め分析を行う。例として以下のようなものを取り扱う。

- (1) ラノベ (ライト・ノベル)
- (2) クレカ (クレジット・カード)
- (3) ダボ (ダブル・ボギー)
- (4) ブ男 (ブサイク・男)
- (5) ファンタビ (ファンタスティック・ビースト)
- (6) ランクマ (ランク・マッチ)
- (7) さつまいもド (さつまいも・ドーナツ)

(1) (2) は複合語が短縮され、3モーラの複合語短縮を形成している例である。(1) は複合語の前部要素から1モーラ、後部要素から2モーラが切り取られているのに対して、(2) は複合語の前部要素から2モーラ、後部要素から1モーラが切り取られている。(3) は複合語が短縮され、2モーラの複合語短縮を形成している例である。(4) (5) (6) は複合語が短縮され、4モーラの複合語短縮を形成している例である。(4) は前部要素から1モーラ、後部要素から3モーラが切り取られており、(5) (6) は前部要素から3モーラ、後部要素から1モーラが切り取られている。(7) は複合語が短縮され、5モーラ以上の複合語短縮を形成している例である。前部要素からは切り取られておらず、後部要素が1モーラに切り取られている。

また(1) (2) (3) (5) の例では、複合語短縮の形式が「前部要素の一部＋後部要素の一部」といった構成になっている。一方で、(4) (6) (7) の例では、「一方の要素の全体＋一方の要素の一部」といった構成になっているといった、語構成における違いも見られる。

本論では以上のことを踏まえ、「前・後部要素1モーラ複合語短縮」において2つの観点から分類を行った。1点目は、1モーラに短縮されている要素の第2モーラが自立モーラであるか、特殊モーラであるかによる分類である。2点目は、「前・後部要素1モーラ複合語短縮」における語構成が、「前部要素の一部＋後部要素の一部」となっているか、「一方の要素の全体＋一方の要素の一部」となっているかによる分類である。1点目の分類は、「前・後部要素1モーラ複合語短縮」は、1モーラに短縮されている要素の第2モーラが、特殊モーラである際に多く生成することを明らかにすること、2点目の分類は生成された「前・後部要素1モーラ複合語短縮」が、合計モーラ数によって生成される語構成が変化することを指摘するために行った。

1点目の分類により、1モーラに短縮されている各構成素の第2モーラが特殊モーラである場合に、「前・後部要素1モーラ複合語短縮」が生成されやすいことを明らかにした。2点目の分類により、生成された複合語短縮の語構成が、「前部要素の一部＋後部要素の一部」といった形をとるのは、2モーラ複合語短縮、3モーラ複合語短縮では多数を占めることを明らかにした。一方で、4モーラ複合語短縮、5モーラ以上の複合語短縮に関しては、「一方の要素の全体＋一方の要素の一部」といった形をとっている例が多数を占めることを明らかにした。このような結果になることは、「複合語のみに許容される1モーラ語」(例:「パーティ」を「パ」と短縮するなど)が見られることも1つの要因であるのではないかと、本論では結論づけている。

George Orwell, *Animal Farm* 研究

本論文は George Orwell(1903-1950)の *Animal Farm*(1945)を題材とし、Orwell による共産主義への風刺の妥当性を労働階級の動物と支配階級のブタに焦点を当てることで再評価することを目的とした。

第1章では、作品上で描かれる共産主義から独裁政治への移行について触れ、政治体制の不安定さについても触れている。支配階級であるブタの Napoleon と Snowball を中心に取り上げ、Snowball は共産主義の指導者として、Napoleon は独裁者として描かれている。はじめは人間から解放された、動物による農場経営を目指していた。しかし、Snowball 追放をした Napoleon が権力を持つようになると、次第に近隣の人間との交渉を始めるようになった。これは、権威を持つものが変化しても、政治体制の根本が変わることはない可能性を示し、政治体制全般を風刺していることがわかった。

第2章では、支配階級のブタで Napoleon を支えた Squealer を中心にどのように他の動物を支配したかを考察した。Napoleon が恐怖で他の動物を支配する中、Squealer は巧みな言葉遣いで労働階級の動物たちを説得した。つまり、彼は他の動物にとって難解な言葉を並べ、虚偽の事実を真として説くことで精神的に彼らを支配していた。さらに、ブタが4足歩行から2足歩行に変化することに着目し、支配階級のブタが権力を乱用するようになるにつれて人間に近い状態に変化していたことから、支配階級を風刺していると結論づけた。

第3章では労働階級の動物の代表とも言える Boxer に焦点を当て、Orwell がどのように現状の生活に疑問を抱かない人々への警鐘を行ったのか考察した。Boxer は労働階級の中で最も農場運営に貢献しながらも、自分の行いに対し揺れ動く場面が見られる。彼の最期は非情な結末として終えることから、労働階級という身分の残酷さを示すと同時に、いつでも自分の現状に疑問を持つべきだと示す側面があったとした。

以上の議論から、Orwell は当時直面した政治体制に疑問を抱き、それらについて取り上げたことで、政治体制への懸念を示していることがわかった。さらに、寓話としてこれらを描くことで現代に生きる人々にも容易に理解させた点で、本作品が名作として語り継がれ、彼の生涯を表した作品と言える結論づけた。

「死」の用字について —『今昔物語集』を中心とした漢字の死亡表現—

全ての生物には死がつきものである。『日本国語大辞典 第二版』によると、「死」の意味は「死ぬこと。生命がなくなること。」とあり、この意味は現代語でも古語でも大きく変わることはない。しかし、「死」を表す漢字として文献で用いられたものは現代とは異なりかつては様々存在した。『訓点語彙集成』で「シヌ」と読まれた漢字を調べ、そこから『大漢和辞典』や『漢辞海』で「死」を直接的に意味するものを絞り込むと十六種類となった。

先行研究では中国の『史記』を扱ったもの（彭国躍（2003））や『日本書紀』を扱ったもの（大原輝代（1958）、伊藤雅光（1983））があり、用例数の多い「崩」「薨」「卒」「死」について調査しているものが多い。そのため、他の漢字の用例については詳細な調査が行われておらず、『日本書紀』が奈良時代成立のためそれ以降の文献における用例も不明であった。

そこで、卒業論文では、主立った漢字以外にも「死」を表現する漢字の用例を調べ、使い分ける基準は存在したのか、存在したならばどのような基準を持っていたのか、比較と考察を試みた。主に死亡の主体の身分や死因に着目している。

今回は平安時代後期に成立した『今昔物語集』を中心とし、『今昔物語集』の原拠となった中国唐代の仏教説話集『冥報記』、平安時代初期の仏教説話集『日本霊異記』との比較を行った。『今昔物語集』は用例数の多い巻第十一～巻第二十を対象とし、『日本霊異記』とは『新編日本古典文学全集 日本霊異記』内の「日本霊異記関係説話表」をもとに、同文説話との比較も行った。また、他のジャンルの作品との比較として、変体漢文で書かれた軍記物の『将門記』からも用例を収集して、使い分けの比較を行った。用例収集の対象として、対象とした十六字を漢字一文字で用いられていること、動詞の形で用いられていること（その際の読みや送り仮名は問わない）、熟語を対象としないこと、死亡を意味することを条件とした。

今回扱った資料の多くは辞書的定義や先行研究で扱われた『日本書紀』と比較すると「身分がひとときわ高い人物」に対しての表現はある程度決まっているが、それ以外の人間や動物に関しては「死」を用いる場合が圧倒的に多く、仏教説話という僧侶や御仏を重んじる作品の中ですら僧侶の死亡表現に差異があり、その基準も明確にはならなかった。また、『今昔物語集』と『日本霊異記』の同文説話を比較した際、『日本霊異記』で「卒」が用いられている場面は『今昔物語集』では「失」が用いられていることが分かった。ここから、「死」は時代が下るにつれて主体の対象が拡大していくこと、平安時代後期には「失」が用いられる場面が増えることを推測している。

今後の課題として、対象の漢字の範囲を広げること、和語的表現を視野に入れること、またさらに後の時代の文献を調査することを挙げたい。

本論文では、与格構文と二重目的語構文について研究した。第2章では Larson (1988) を扱い、両構文内に生じる非対称性を基にそれぞれの構造について、第三章では第二章で提案された構造に修正を加えた Aoun and Li (1989) の提案を扱い、与格構文と二重目的語構文の構造について調査した。

はじめに、二重目的語構文、与格構文とはそれぞれ (3a)、(10a) のような文のことを指す。第2章では Larson (1988) を扱い、与格構文と二重目的語構文内に見られる非対称性を 2.1 と 2.1.1 で確認した。この非対称性は構成素統御を用いて確認され、第二章ではこの非対称性を基に構造分析を行う。Larson (1988) は動詞と前置詞句が構成素を成す提案をしており与格構文から二重目的語構文の派生を支持している。構造分析について Larson (1988) は VP を2層用いた VP-Shell を仮定し与格構文と二重目的語構文のそれぞれの構造の分析を行なった。与格構文では (21) に示されるように V Raising を、二重目的語構文では (23) , (24) のように動詞の働きを受動化に似た働きをすると仮定した上で V Raising と Dative Shift を適用し、それぞれの構文の構造について説明付けている。受動文の動詞は2つの特徴があり、1つは目的語 NP への目的格が付与されないこと2つ目は主語 NP への θ 役割が付与されないことである。一方、Aoun and Li (1989) では与格構文、二重目的語構文に関して Larson (1988) を含めた提案では説明不可能であるとして (28) を提案している。(28) では先行研究で考慮されていた①目的語 NP 間の所有関係②構文内に見られる非対称性の2つの点を押さえた提案となっている。Aoun and Li (1989) の提案は二重目的語構文から与格構文への派生を支持しているという点で Larson (1988) とは異なる提案となっている。最後に、Takano (1996) を扱った。Takano (1996) では Larson (1988) で考えられていた提案に対して例外的なデータを示した。(36) では Larson (1988) にて指摘された与格構文では theme 句が goal 句を構成素統御するという考察に対して、そのような構成素統御を行なった場合にも適格な文が生成できないことがあることを示している。このデータとともに Takano (1996) は goal 句が theme 句よりも高い位置に存在する Aoun and Li (1989) の提案を支持している。

The Logic of Politeness Using Imperative Sentences in English

本論文では、丁寧さを表す英語の命令文について、先行研究の成果を踏まえ、実際に収集した用例を観察しながらその語用論的特性を理論的、記述的に明らかにした。本論文は4章から構成されている。

第1章では、発語内効力(illocutionary force)の観点から命令文の機能を分類し、特に REQUEST, OFFER の機能に関して Leech (1983)が提唱する気配りの公理(Tact Maxim)と照合しながら、命ぜられる内容に対する聞き手の負担と利益が命令文の使用にどのような関連しているのかを論じた。

第2章では、間接発話行為に関する Yule (1996)や Uchida (2013)の知見を検証し、INSTRUCTION, PROHIBITION, WARNING の機能を果たす命令文の使用と緊急性の関連性について理論的、記述的に論じた。具体的には文脈や場面における緊急性(emergency)の度合を比較し、緊急性の高さが命令文の積極的な使用に繋がることを明らかにした。

- (1) “Listen to me, Rona. This is an emergency!” (John Probst, *Tribulation's Seven Seals*)
(2) Walk up to the door, turn the door handle clockwise as far as it will go, and then pull gently towards you. (cf. Open the door.) (Yamanashi (1986))

緊急性が高い場合には、話し手は聞き手に命令や指示の内容を明瞭かつ即座に理解させる必要があるため、命令文が使用されることを考察した。

第3章では、第2章の間接発話行為に言及し、Thomas (1995)、Kageyama et al. (2003)、Fletcher (2012)等の研究成果に基づいて、話し手の意図に到達するまでの聞き手の思考を図式化することで視覚的に提示した。その結果、命令文を用いた場合は聞き手の思考の負担を減らすことを明らかにした。さらに、命令文の使用が話し手と聞き手の社会的・心理的距離を縮めるという事実も観察した。具体的には、英語圏の企業広告を例に挙げ、企業広告のキャッチコピーで用いられる命令文は顧客に対して心理的距離を縮めるだけでなく、自社の提供する商品が顧客を満足させる自信を示唆していることを記述した。

第4章では、本研究成果をまとめ、聞き手の負担と利益の尺度、緊急性の尺度、命題の明瞭性の尺度を示しながら、英語の命令文に関する今後の研究課題と発展の展望を記述した。今後の研究課題として、英語の命令文のみならず日英語の他の言語表現の分析を通して、話し手と聞き手の社会的関係とことばの使用の連関をさらに解明する必要がある。本論文は、英語で執筆され、可能な限り実際の言語資料を活用しながら理論的に考察をすすめた点に特徴がある。本研究成果は言語学分野のみならず英語教育や社会学の分野においても教育的意義を持つものと考えられる。

論文名

S.ラフマニノフ 前奏曲ト短調作品23-5の考察 ～音楽的特徴と民族性について～

S.ラフマニノフが1903年に作曲・発表した『10の前奏曲』の中から《前奏曲ト短調 Op23 No.5》について、その音楽的特徴を分析し、曲の持つ民族的な要素について研究を行った。

第1章ではラフマニノフの人生について振り返り、彼が幼少期を過ごしたノヴゴロドの自然が彼の音楽に影響を与えていることを確認した。

第2章では《前奏曲ト短調 Op23 No.5》の楽曲分析を行った。前半部と再現部はどちらも行進曲風のメロディで、軍隊の進行のような印象を受ける。このメロディはショパンの《ポロネーズ》イ長調 Op40 No.1の影響を受けている。中間部は他の2か所とは異なり、ゆったりとした、歌いあげるようなメロディである。対照的なメロディが交互に現れるが、3度の和音という共通点を持つ。

第3章では、第2章で行った楽曲分析をもとに、ロシア正教の鐘との関わり、ロシアの風土との関わり、ロシア民謡との関わりの3つの観点から、曲のロシア的要素を見出した。ラフマニノフはあらゆるロシア的なものに強い関心を示しており、強い愛着意識を持っていた。ロシア正教の鐘の種類の中でも、ペレズヴォンというキリストの受難と復活を示す奏法が曲中に使われている。また、生まれ育ったノヴゴロドや青年期以降にたびたび足を運んだイワノフカの自然に感銘を受けて作曲を行った。ロシア民謡との関わりについては、井上頼豊の示す4つの要素（音階の種類、全音階進行、転調、音階的移行）をもとに分析を行った。結果、全音階的進行と転調の少なさ、並行調が交互に現れるというロシア民謡的な音階的移行という点でロシア民謡の要素を満たしていた。

以上のように、《前奏曲ト短調 Op23 No.5》は複数の形でロシア的な要素を含む曲であることがわかった。ラフマニノフ自身は過去の作品、ロシア民謡や著名な作曲家らの作品を模倣しようという意図はなかった。しかしこれほどまでに、要素的な共通点を多く持つという点で、彼が潜在的に持つロシアに対する愛着意識、帰属意識は非常に強いものであったと言える。

川端康成初期文学における特徴について

—大正十四年の随筆活動をめぐって—

卒業論文では、大正十四年の伊豆湯ヶ島での滞在において川端が書いた随筆作品に焦点を当て、後の川端文学の基底として形づくられた死生観・自然観・旅の意識の三つの要素を川端初期文学の特徴として捉えた上で、その随筆作品の文学的意義を考察し、大正十四年の文学活動の位置づけを展望した。

第一章では、川端の人生観や文学観に多大な影響を与えたとされる、大正十四年の伊豆湯ヶ島滞在における日々について考察を行い、そこで書かれた小説作品を分析した。当時の川端は伊豆湯ヶ島にて孤独で沈潜とした日々を送っていたとされ、そのような日常の中で行われた文学活動もとい小説作品からは、自身の生い立ちや青春の哀愁など内部深くの心象へと眼差しを向けた川端の自己省察や、生と死の間に交感する自己相対化や神秘的要素といった心の機微を読み取ることができた。このことを踏まえ、湯ヶ島での日々において小説作品よりも折に触れて書かれた随筆作品に注目することで、川端の後の人生観や文学観に影響を及ぼしたとされる初期文学の特徴といえる要素を、より率直で純粋な声として聴くことができるのではないかと推測した。

第二章では、大正十四年に書かれた随筆作品を対象として、そこに表れる特徴を、主に死生観・自然観・旅の意識の三つの要素に分類して考察を行い、その上で特筆すべき随筆作品とその重要性について指摘した。死生観については、それまでやや観念が先行する形で主張されていた万物一如・輪廻転生の思想が、伊豆湯ヶ島での孤独な日々により自然を見つめ自己を省察する中で、いわば自己の生活体験に密着する形で深められ、それが随筆作品に吐露されているのだと考察された。自然観については、伊豆の竹林描写に端的に表されているように、自然と自己を一元的に融和した形で描こうとする姿勢が認められた。旅の意識については、文字通り旅人として孤独な日々を過ごす中で、川端の生を支える骨格として実体化されていき、その過程が当時の随筆作品群に率直な形で表白されているのが分かった。

以上のことから、大正十四年の川端の随筆作品において分類された三つの要素は、川端初期文学の特徴として後の川端文学の基底を形づくり、彼の人生観や文学観の確立に極めて深く関わっていたと考えられ、川端初期文学の表現手法が形成された過程を考える上で大正十四年の随筆作品は、非常に重大な役割を担っているのだと結論付けた。

論文名『大鏡』の研究―怪異体験を通して―

卒業論文の研究対象は『大鏡』である。作品内で描かれる怪異に注目し、その怪異が作品に与える効果を明らかにすることを目的とした。怪異を体験する人物の描かれ方の違いや、同逸話の『大鏡』と他作品での描かれ方の違いを検討することで考察を進めた。

第一章では怪異を体験する人物の描かれ方に注目し考察した。第一節では天皇の描かれ方を確認し、そこから怪異体験をする天皇たちは冷泉流に限り、物の怪に対抗する姿が描かれず退散させることができていないように描かれていることを指摘した。第二節では大臣たちの描かれ方を確認した結果、大臣たちは物の怪に立ち向かい退散させる、もしくは退散させずとも良い結果となった姿が描かれていた。描かれる大臣は忠平から道長までの直系四人と、時平を合わせた五人であり、時平だけが怪異を完全に退散させることができていないことや、退散させることができたのは王威に服したからだとするような、描かれ方の異質さからこれら四人と時平の逸話には別の効果があるとした。これらのことから天皇たちの怪異体験は、物の怪に抗えないことを描き道長直系大臣の能力を際立てながら、円融流の天皇が怪異の害を受けないことで道長の栄華を強調する効果があるとした。道長直系大臣たちは、物の怪に立ち向かう姿を描きその剛胆さや能力の高さを強調しており、これら大臣四人を称賛する効果を生み出すと考察した。つまり、天皇にしても大臣にしても怪異体験を描くことで道長らを讃える効果があるとした。

第二章では他作品との比較から考察を進めた。第一節では『大鏡』内での逸話の描かれ方、第二節では他作品での描かれ方をそれぞれまとめ、第三節ではそれらを比較してわかることを検討した。明子の物の怪の話からは、明子についての物の怪が天狗でもあり鬼でもある例であったことから『大鏡』ではそのどちらの意も含む「物の怪」という言葉で表現したと考えた。三条天皇の物の怪からは、三条天皇についての物の怪である桓算が天狗である可能性が高いことを指摘しながら、他作品に比べ詳細な描写がされていることは『大鏡』内でその後何回か桓算についての話題が出ることに由来しているとした。道真雷神の説話からは、時平が怪異体験をした大臣の中で一人異質な存在だとして、この時平の逸話は道長直系には及ばないことを示すものとして道長直系の特別さを強く示す効果があると考えた。敦明親王東宮退位事件からは、作者が真相と真相ではない物の怪によるものだとする話を両方描いたことは結果的に道長の栄華を語る中で障害にはならず、むしろ道長に悪い印象を与えないために物の怪の話を入れていると考えられた。

第一章、第二章を通して、『大鏡』では道長の栄華を語ることを目的とし、その栄華を強調するために怪異現象を用いていると結論付けた。

『とりかへばや物語』の研究―女君の「心強さ」について―

卒業論文では、『とりかへばや物語』の女君に注目し、女君の言動分析、他の女性との比較を通して、女君の人物像及び人物像が作品に与える影響について考察し、作品の主題理解へ繋げることを目的とした。

第一章では、女君の生涯を幼少期、男装期、女性期の三期に区切り、女君の言動分析を行った。その結果、はじめは異装の身の上を恥じ人並みの生活を送ることをあきらめていたが、男性として暮らした経験による「男に馴らひにし御心」から強い意志を持って理性的な判断力によって積極的に行動する「心強さ」を得て、様々な局面でこれを発揮しながら自分の人生を主体的に生きる女性へ成長したことが読み取れた。「男に馴らひにし御心」表現は物語終盤で見られなくなることから先行研究では女君の「心強さ」は最終的には失われるとする論があるが、本論文では女君はそれを失ったのか、持ち続けたのかということについて、他の表現から女君の「心強さ」を見出すことができるかという観点により第三章で検討した。

第二章では、『源氏物語』の女性、『とりかへばや物語』の四の君と女君を比較することで、女君の独自性を明らかにした。『源氏物語』の女性は行動を起こすことに消極的で問題があるときには出家や死をもって自分が対象から離れることしかできないのに対して、女君は「心強さ」によって積極的な行動をとって栄華をつかむという点で、従来の女性像とは異なる女性として描かれているという女君の独自性を見出せた。また『とりかへばや物語』の四の君は受け身、女君は主体的であるという姿勢の違いが明らかになり、これは女君は男性として暮らした経験から男性的・女性的な自分の在り方を比べ、幅広い選択肢の中からよりよい行動を選択できることによるものであるという独自性を見出した。

第三章では、第一章で得た問題である「心強さ」の消失について、先行研究から涙を「押し拭ふ」表現に注目して考察した。男性に用いられることが多い力強いしぐさが女君に用いられることで女君の責任感や理性的な判断力が表現されており、ここに「心強さ」があらわれているといえる。そしてこれは「男に馴らひにし御心」表現の消失後にも見られることから、女君は女姿に戻り中宮となる物語の最後まで「心強さ」を持ち続けたと考えた。

以上のことから、女君は「男に馴らひにし御心」によって得た「心強さ」を持ち続けたことによって、自分の存在を認めて肯定し、自分の人生をよりよいものにするために主体的に行動することができる人間に成長した人物であることを明らかにした。そして当時の一般的な女性像とは異なる人物を描いたことで、栄華を極めることが必ずしも女性にとっての幸福ではないということをあらわす作品となり、多様な女性の生き方を表現するということがこの作品の主題であると結論付けた。

現代日本語の自然談話に見られる「クナイ」の同意要求について

本論文は、現代日本語の自然談話に見られる文末形式「クナイ」の同意要求用法について、特にその接続条件や文法性について明らかにすることを目的とした論文である。第1章では、序論を述べる。第2章では、「クナイ」に関する先行研究をふまえ、「クナイ」形式の文法および使用状況、また接続要素との親和性について確認する。特に、盛田・小島(2016)の「同意要求として使われる状況の想起のしやすさが「クナイ」との共起の容認度と密接に関係している」という見解は、基本的に本論文でも踏襲する。第3章では、「クナイ」の文法やその効果、また接続条件についての考察を述べる。「クナイ」の接続形式について、接続出来る語ごとに分類を行うと、「形容詞接続」「動詞接続」「形容動詞接続」「名詞接続」の4つに分類される。さらに、各接続形式をそれぞれ要素ごとにタイプ分けすることで、「クナイ」形式について細かく検討する。第4章では、「クナイ」形式の接続形式ごとの接続条件と、その容認度についてのまとめを述べる。

「クナイ」の用例・例文の収集は自然傍受や先行研究、X(旧 Twitter)からの引用によるものである。これらの調査をふまえ、第3章を中心に検討を行う。第3章で、形容詞接続を「連用形接続」と「基本形接続」、動詞接続を「活用別接続」と「表現形式別接続」、形容動詞接続を「語幹接続」、名詞接続を「普通名詞接続」と「被所有名詞接続」にタイプ分けを行い、「クナイ」形式の分析を行った。

本論文における目的は、文末形式「クナイ」の同意要求用法の接続条件や文法性について明らかにすることである。その結果、動詞の意志性や同意要求を必要とする状況の想起のしやすさが接続条件に関与することが明らかとなった。また、各接続形式に見られる文法性については、次の通りである。まず、形容詞接続である。基本形接続は、形容詞の基本形に「クナイ」を接続した形で、限りなく使用例が少ない。しかし、その使用例から「クナイ」形式に「意味の強調」と「驚き」の効果があるという仮説が立てられる。次に、動詞接続である。活用別接続では、動詞の活用ごとに「クナイ」を接続した。活用によって、「クナイ」の共起許容度に違いは見られない。また、動詞の意志性と「クナイ」との共起許容度が関係する。表現形式別接続は、動詞に「テ形」「タ形」「否定形」が付与された形ごとに「クナイ」を接続した。「テ形」では、「テ形」の種類ごとに許容度がバラバラである。一方、「タ形」「否定形」は動詞の意志性を問わず、どんな動詞にも付与される可能性が高い。その次に、形容動詞接続である。語幹接続では、形容動詞の語幹に「クナイ」を接続した。名詞語幹との共起許容度はあまり高くない。一方で、様態の「そうだ」の語幹との共起許容度は、その性質と「クナイ」の「驚き」を表現する効果の類似性から親和性が高そうである。最後に名詞接続である。名詞接続は、絶対的に共起例が少ない。名詞接続では、肯定命題が「XはY(名詞的)だ」となるタイプと「XはY(形容詞的)だ」となるタイプの二つがある。普通名詞接続は、普通名詞と「クナイ」の接続である。主に、指示詞・代名詞・形式名詞・派生名詞が「XはY(名詞的)だ」のタイプであり、それ以外の不明確な名詞で「XはY(形容詞的)だ」タイプをとる。被所有名詞接続は、被所有の性格を持つ名詞と「クナイ」の接続である。主に、概念や事由、所有物を指す名詞であることが多く、肯定命題は「XはY(名詞的)だ」のタイプをとる。

A Study on Cultural Differences between Japanese and English Communication Style:
A Case Study of *Spirited Away*

本論文では、国際的評価を受ける日本のアニメーション映画『千と千尋の神隠し』（北米版英語タイトル *Spirited Away*, 原作・脚本・監督：宮崎駿）を題材に、日本と英語のコミュニケーションスタイルの違いと日本の作品が英訳されたときに台詞にどのような違いがあらわれるのかについて理論的、記述的に明らかにした。本論文は5章から構成されている。

序章では、本論文の全体構成、背景、目的および期待される成果について説明した。第1章では、文化と翻訳の側面より先行研究を紹介した。まず、明示的メッセージが不要で、意味が文脈に依存している文化（＝ハイコンテキスト文化）と、逆にコミュニケーションを取る際には明示的説明が必要で意味が情報に多く含まれている文化（＝ローコンテキスト文化）に文化を類型化する Hall (1976)を概観した。次いで、翻訳についての先行研究 (Pedersen (2011); Pym (2014); Irina (2019)等) に注目し、とりわけ Pedersen (2011)が提案する「Retention」「Specification」「Direct Translation」「Generalization」「Substitution」「Omission」の6つの翻訳方略を検証した。第2章では、Pedersen (2011)の翻訳方略「Direct Translation」「Substitution」「Omission」に基づいて、*Spirited Away*のスク립トを分類した。Direct Translation では逐語的な翻訳が用いられているが、日本語よりも英語の方が意味が直接的に伝達されることを論じた。Substitution では置き換えが用いられており、日本語の曖昧なコミュニケーションに比べて英語版では合理的に会話が行っていることを実証的に明らかにした。Omission は省略の方略のことを指すが、英語版では日本語の抽象的表現を取り除き、より具体的なものに置き換えることで明瞭に作品が理解できるようになっていると分析した。第3章では、Pedersen (2011)の翻訳方略では分類され得ないスク립トを考察した。具体的には、新たに情報が追加されている場面と、台詞がアレンジされている場面を取り上げた。このような英語版特有の台詞がある背景には、日本のようなハイコンテキスト文化ではない英語圏の英語話者の作品に対する理解の手助けをするだけでなく、日本版の作品内容をより明瞭にする効果があることが明らかになった。第4章では本研究成果をまとめ、実際に *Spirited Away* において、英語話者が物語の流れを理解しやすいように様々な翻訳の工夫が凝らされていることや、原作にはないようなセリフの補完が認められることを記述した。また全体的に英語版のコミュニケーションスタイルは、日本語版とは異なり、曖昧ではなく明瞭、かつ合理的であることを論じた。なお、本論文は英語で執筆され、可能な限り実際の映像資料を活用しながら、実証的かつ理論的考察をすすめた点に特徴がある。本研究成果は言語学分野のみならず日本語教育や英語教育、異文化コミュニケーション論の分野においても教育的意義をもつものと考えられる。

中国語の描写表現についての一考察
—動作に関するオノマトペ表現の対応状況から—

沓澤杏佳

事物をより生き生きと具体的に記述する方法の1つにオノマトペがある。日本語のオノマトペが音の再現を中心とする「擬音語」と、様子のイメージを中心とする「擬態語」に分けられるのに対して、中国語のオノマトペは「擬音語」と「擬態語」のような区別が定まっていない。特に「擬態語」に当たる表現の定義は明確ではなく、従来の研究でもその意見が分かれている。しかし中国語においても「擬態語」に当たるような、状況を具体的に描写できる表現、特に人間の動作や様子をありありと描写する方法があるはずである。本稿ではそのような「中国語におけるオノマトペ表現」に焦点を当て、特に人間の動作や様子について、中国語の表現の豊かさを捉えることを目標とした。調査には中国語の現代小説と、それぞれの日本語翻訳版を利用し、オノマトペとして翻訳されている部分を抜き出すことで、「描写性の高い中国語」とはどんなものか全体像を捉えた。日本語のオノマトペとして見つけられた表現は動詞ごとに整理し、第5章において状況に沿って大まかに4つに分類した。第1節と第2節はそれぞれ「意識的に行われた動作」、「無意識的に行われた動作」であり、動詞や形容詞の原型、重ね型、数量詞を使った表現、成語などのパターンが挙げられた。また従来の統計を元にした先行研究においては見られなかった“A—B”や“A来A去”などのパターンも発見できた。第3節と第4節では「感覚・感情とその感情が引き起こす状態や反応」、「抽象的な表現と性格」について整理し、ここでは第1節や第2節で挙げた表現方法の他にも比喻表現の例が多く挙げられ、状況ごとに別角度からのアプローチで具体的な描写が試みられていた。また日本語の小説の中国語翻訳版も調査し、日本語のオノマトペがどう中国語に訳されているかを参考にした。第6章では、日本語の「擬態語」が描写するより具体的な状態を、中国語でどのようにありのまま再現しようとしているのか例を挙げた。このような分類で用例を整理していくと、中国語は状況に合わせて臨機応変に表現を変えながら、自然な文章で場面を言い表すことができる言語だということが分かった。また中国語のオノマトペ表現に関する他の先行研究では、「擬態語」の枠組みを最初から定めたり、調査する小説のジャンルや作家などを絞って調査したりしていたが、本稿ではそのように品詞や作品のジャンルで対象を絞らなかったため、より多くの描写表現に着目し、中国語の表現の豊かさを捉えることができた。

A Study on Countability in English Nouns

本論文では、英語における可算名詞と不可算名詞の相違点や類似点などの特徴を分析し、両者の使い分けについて理論的、記述的に明らかにした。本論文は7章から構成されている。第1章では、本論文の全体構成、背景について説明した。第2章では、英語の可算名詞と不可算名詞の違いについて英語母語話者の認知的視点から理論的、記述的に論じた。具体的には、境界線の有無によって可算名詞と不可算名詞の使い分けがなされることを示した。

第3章では、Huddleston and Pullum (2005)による6つの基準と照合しながら可算名詞と不可算名詞の違いについて論じ、可算名詞が不可算名詞になる場合、またその逆の場合について分析した。Huddleston and Pullum (2005)による6つの基準を以下に示す。

- 1) Drink/food substances and servings 2) Food and varieties 3) Animals and food
- 4) Abstracts and event instantiations 5) Abstracts and results
- 6) None substance interpretations of primarily count nouns

第4章では、*Taishukan's Genius English-Japanese Dictionary* (5th)を基に、可算名詞として使われても不可算名詞として使われても日本語訳に相違がない英語の名詞の例を挙げた。しかし、日本語訳には違いが出ないが、可算名詞として名詞が用いられた場合には、具体性が示されることを確認した。

第5章では、Ishida (1998)の知見を検証し、境界線の有無という観点から可算名詞と不可算名詞の違いを明らかにした。例えば、境界線を有しないモノは不可算名詞として用いられ、空間的広がりがあることが含意されるため、‘space’は‘a space’に比べて空間が広いことを表すことなどを論じた。

第6章では、Quirk et al. (1985)、Gabrijela and Tanja (2013)、Ishida (1999)の知見を参照し、自然や人間、人間の人工物、感情を表す名詞は、可算名詞として扱われるか、あるいは不可算名詞として扱われるかによって大きく意味が異なることを示した。例えば、通例可算名詞である‘car’が不可算名詞として用いられると、車の性能や車が人間にもたらす快適さを表現することができることを観察した。

第7章では、本研究成果をまとめ、今後の研究課題と発展の展望を記述した。可算名詞と不可算名詞の従来の分類方法は本論文で論じた方法以外にも確認される。そのため名詞の可算性についてより総合的視点から研究を進める必要がある。本論文は、英語で執筆され、可能な限り実際の言語資料を活用しながら理論的考察をすすめた点に特徴がある。本研究成果は言語学分野のみならず日本語教育や英語教育の分野においても教育的意義をもつものと考えられる。

現代日本語における名詞から動詞への転換 —「スル」の付加できる語の分類—

動作性を持たない名詞にスルが付加した表現は、口語的、幼稚な表現であるとされておりあまり研究が進んでいなかった。本稿では、動作性を持たない名詞を分類し、それぞれスルを付加させることでどのような意味になるのかを調査した。

その結果、「～らしい様子である」という意味は、前節する名詞がどのような種類のものであれ現れることが分かった。この意味は、「イチゴイチゴする」、「新潟新潟する」のように、名詞部分を繰り返すことでより顕著になる。このような名詞の繰り返し＋スルという形式はオノマトペ＋スルと意味と形の面で共通点がある。

「～らしい様子である」という意味にならないものは、以下のとおりである。

①道具名詞＋スル →その道具を使う

「バケツする」「スプーンする」など、その道具を用いてすることが一つに定まりにくい時は言えない。また、「ソファする」「花瓶する」なども使用例が見られない。「ソファに座る」「花瓶に活ける」のように、その道具が動作の終着点であり動作の際に動かされていない場合には言うことが出来ない。変形しない容器＋スルも、この理由からの確にはならない。

②料理＋スル→作る

「かまぼこする」「ナタデココする」など、自分で作ることが難しい食べ物＋スルは例が見つからなかった。薬、健康食品、嗜好品などは「食べる」という意味で使われることがあるが、これらは食べるという動作よりもその効果に重点を置いていると考えられる。

③素材・調味料＋スル →包む、敷く、かける、まぶす等、表面に見えるように使う

表面にそれとわかるように使う場合にしか用いられない。例えば、衣や生地 of 打ち粉として使う際には「小麦粉する」ということが出来るが、ケーキなどの生地練りこむ場合には用いることはできない。

④建物・施設＋スル →その施設を使う

「マックする」など、飲食店＋スルの例が多い。まれに「建築する」という意味になることもある。「運動する」という意味で「ジムする」は例が見つかるのに対し「体育館する」が見つからないなど、スルを付加できる基準は不明である。

⑤イベント＋スル →そのイベントに参加する

そのイベントで一般的にすることが決まっていない場合、いうことはできない。

⑥学問・芸術＋スル →その手法で考える

記事のタイトルや、キャッチコピーなどに使われやすい。

これらのほかに、「追い苺」「朝マック」など、複合名詞にすることで、イベントのようなコト名詞として理解され、スルを付加しやすくなる。

動作性を持たない名詞＋スルには表しにくい意味がある。食べ物＋スルが「食べる」という意味にならない、「木炭する」などのような燃料＋スルが「燃える」という意味で使われないなど、名詞部分が表すものの消滅や変化を伴うものは名詞＋スルで表しにくいことが分かった。また、容器＋スルなど、「置く」「入れる」などの動作も動作性のない名詞＋スルでは表しにくい。名詞部分がその動作自体にかかわっているという認識が薄く、名詞の部分に意味の重点を置くことになる動作性を持たない名詞＋スルでは表しにくいのではないかと考える。

「～らしい様子である」という意味は、前接する名詞がどのようなものであれ制限なく表れることから、動作性を持たない名詞＋スルの最も基本的な意味であると考えられる。

A study on English Polite Expressions with the Past Tense

本論文では、英語の過去形の丁寧用法の特性について、単純な過去の出来事や状態を表す用法と区別されて解釈される文脈を分析しながら理論的、記述的に明らかにした。本論文は5章から構成されている。第1章では、本論文の全体構成、目的について説明した。第2章では、過去形の丁寧用法について説明し、過去形にすると丁寧さが表出される理由について、Quirk et al(1985), Leech (1987), Swan (2016)などの従来研究成果を検証した。具体的には、発話者が聞き手に手助けを依頼する場合、発話時が現在にも関わらず ”Could you give me a hand?” のように意図的に助動詞部分や動詞部分を過去形にする際に働くメカニズムの語用論的観点から観察した。過去形にすることで、現在（＝現実）との間に時間的・心理的距離が生じ、話し手の要望に聞き手が即座に対応する必要はないという遠慮や、聞き手が依頼を断っても問題はないという話し手の姿勢が表されることを観察した。第3章では Hall(1976)、児玉(2012)、星見(2012)、Meyer(2014)、山科(2018)などに代表されるコンテキストと、それにかかわる文化についての研究を概観した。コンテキストの分類や、英語圏はローコンテキスト文化であることなどを確認し、発話内に含まれるコンテキストに焦点を当てながら次章以下の考察の基盤を固めた。第4章では、ポライトネスに関する研究、とりわけ Brown and Levinson (1987)が提唱する Face Threaten Acts(「面子」を脅かす行為)に着目し、英語の過去形の丁寧用法について理論的に考察した。その結果、先行研究で挙げられていたように発話時が現在である点を確認するとともに、言及される時制も現在である点、過去形の使用の他にも丁寧さを表現する方略が発話内で求められている点が、過去形の丁寧用法が単純な過去の出来事や状態を表す用法と区別して解釈される文脈の特徴であると結論付けた。第5章では、本研究成果をまとめ、今後の研究課題と発展の展望について記述した。英語非母語話者と私たちのような非英語母語話者が英語を用いてコミュニケーションを行う場合には、周囲の状況や対人関係を考えながら、英語特有のコミュニケーションスタイルに基づいて丁寧さを伝達する必要がある。本研究では言語的コンテキストに着目したが、今後は間接発話や、非言語的コンテキストにおける丁寧用法の使用についても研究を進める必要がある。本論文は英語で執筆され、可能な限り実際の言語資料を活用しながら理論的考察をすすめた点に特徴がある。本研究成果は言語学分野のみならず、英語教育の分野においても教育的意義をもつものと考えられる。

ロシア語の **ся** 動詞とフランス語の代名動詞の再帰性の対照

本論文では、ロシア語の **ся** 動詞とフランス語の代名動詞の再帰性の対照を行った。以下、ロシア語の **ся** 動詞とフランス語の代名動詞の違いと、本論文における術語の定義、ロシア語の **ся** 動詞とフランス語の代名動詞の形式的特徴の対照結果、ロシア語とフランス語における再帰的用法の使用の判断基準の対照結果の3点について記述する。

第一に、ロシア語の **ся** 動詞とフランス語の代名動詞の違いと、本論文における術語の定義について記述する。先行研究におけるロシア語の **ся** 動詞とフランス語の代名動詞の用法の分類の概観を行い、ほとんどの先行研究の分類で登場する主な用法が共通していることを確認した。ロシア語の **ся** 動詞の主な用法は受動的用法、自発的用法、再帰的用法、相互的用法、本来的用法で、フランス語の代名動詞の主な用法は再帰的用法、相互的用法、受動的用法、本来的用法である。フランス語の自発的用法は、参考にした文法書のうち、約半数の分類で用いられていた。Kemmer (1993, 1994) は、再帰と中動の意味の違いを議論している。再帰と中動の違いは、「始動者」と「終点」の分化の度合いの高低による。分化の度合いがより高いものが再帰で、より低いものが中動である。分化の度合いは連続的であるため、再帰と中動の間に明確な境界を引くことは困難である。Kemmer (1993, 1994) によれば、ロシア語の再帰マーカ―は *себя* で、中動マーカ―は *-ся* である。フランス語では、再帰マーカ―と中動マーカ―はともに *se* である。先行研究と Kemmer (1993, 1994) の概観をもとに、本論文では「ロシア語の **ся** 動詞の再帰的用法は中動を意味する」「フランス語の代名動詞の再帰的用法は再帰と中動を意味する」という定義づけを行った。

第二に、ロシア語の **ся** 動詞とフランス語の代名動詞の形式的特徴の対照の結果を記述する。ロシア語の **ся** 動詞がとることのできる形式は、以下の3つである。

1. 主格＋〔動詞＋中動マーカ―（対格）〕
2. 主格＋〔動詞＋中動マーカ―（対格）〕＋造格
3. 主格＋〔動詞＋中動マーカ―（対格）〕＋造格＋前置詞句

フランス語の代名動詞がとることのできる形式は、以下の3つである。

1. 主格＋動詞＋対格（再帰・中動マーカ―）
2. 主格＋動詞＋対格（再帰・中動マーカ―）＋前置詞句
3. 主格＋動詞＋与格（再帰・中動マーカ―）＋対格＋前置詞句

第三に、ロシア語とフランス語における再帰的用法の使用の判断基準の対照の結果を記述する。再帰的用法は、ロシア語の **ся** 動詞とフランス語の代名動詞に共通する用法である。しかし、再帰的用法を使用することができるかを判断する基準は異なっている。ロシア語の **ся** 動詞の再帰的用法を用いることができるのは、動詞が完了状態を含意しておらず、動作主の意志により動作主の身体部位が動くと同時に、動作主の全身または頭部が動くときである。一方、フランス語の代名動詞の再帰的用法を用いることができるのは、動詞が完了状態を含意していて、動作主が行為を行った結果動作主に外部からの力が加えられるときである。言い換えると、ロシア語は使用の判断基準が動作主に置かれている「動作主内部完結型」で、フランス語は動作が何かしらの力となって認識されることが使用の判断基準になっている「動作認識型」である。

A Study on Negative Prefixes in English

英単語の同じ語幹に異なる否定の接頭辞が接続されることでどのような違いが生ずるのか、また特定の接頭辞が特定の単語に接続されるのはなぜであろう。本論文では、主に“imbalance / unbalance”と“dislike / unlike”を考察対象として、従来の先行研究の分析を踏まえつつ、否定の接頭辞と語幹の関係性を理論的、記述的に明らかにした。本論文は5章から構成されている。

第1章では、本論文の全体構成、背景、目的および期待される成果について説明した。

第2章では、否定の接頭辞に関する先行研究の成果を検証し、接頭辞と語幹の語源の関係性や、各接頭辞が接続する単語に及ぼす意味的影響および接頭辞と品詞の関係性について分析した。接頭辞と語幹の語源の関係性については、*in-(im-)*と *dis-*はラテン語由来の単語に、*un-*は英語やフランス語由来の単語に接続しやすいことを明らかにした。また、*in-(im-)*は **negative prefixes** に、*dis-*と *un-*は **negative prefixes** と **reversative or privative prefixes** に分類されること、否定辞によって接続されやすい品詞が異なることを Huddleston and Pullum (2002)等に基づいて観察した。具体的には、*in- (im-)* は形容詞との接続は容認されるが、名詞との接続は比較的まれで、動詞との接続は容認されない。**negative prefixes** の *dis-* は動詞に、*un-* は形容詞と名詞に接続されやすく、**reversative or privative prefixes** の *dis-* と *un-* は両方とも名詞と動詞に接続されやすいことを論じた。

第3章では、先行研究や *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed.等の説明を概観し、“imbalance / unbalance”と“dislike / unlike”の意味と用法について観察した。観察の結果、接頭辞が接続することで語幹の単語と対になる意味が存在し、“balance”はフランス語由来、“like”は用法によって由来が異なるなど多くの起源をもつことを明らかにした。

第4章では、第3章での分析結果が第2章で考察した接頭辞に関する先行研究の主張と整合性が取れているかを検証した。接頭辞と語幹の語源の関係性について、概ね先行研究の知見と合致していることを明らかにした。従来の研究で指摘されてきた接頭辞と語幹の接続されやすさ、接頭辞と語幹の語源の関係性についても収集した言語資料も基づいて実証的に分析した。また、各接頭辞が接続する単語に及ぼす意味的影響や接頭辞と品詞の関係性についても考察し、得られた知見は先行研究の説明を補完するものとなった。

第5章では、本研究成果をまとめ、今後の研究課題と発展の展望を記述した。否定の接頭辞は「否定」の意味を持つ接頭辞として認識されているが、厳密には「否定」と「反転」の2つの分類を含んでおり、2つの違いは明確ではない。否定の接頭辞の接続により様々な状態を表す“like”のような単語における否定と反転の使い分けについては今後の研究課題である。本論文は、英語で執筆され、可能な限り実際の言語資料を活用しながら理論的考察をすすめた点に特徴がある。本研究成果は接頭辞の研究に寄与することが期待される。

Harris 分布主義の検討と多義語分析への応用

「自然言語処理」とは、人間の言語（自然言語）をコンピューター上で処理・分析する AI 分野ある。自然言語処理は基本、自然言語（主に単語）を数字の行列に変換し、単語間の出現関連性を表す「エンベディング」技術を用いる。エンベディングは、意味的に似たような単語は、似たようなコンテキストで出現するという「分布仮説」を言語学的根拠に設定し、言語学知識を応用せずにテキストデータから単語の意味を把握する。

第2章では、分布仮説の定義が、実際には一致していないことを2つの根拠と問題点を提示しながら説明した。第1に、分布仮説の起源として引用される言語学者 J. R. Firth と Zellig Harris (以下「Harris」と記載する) が、外部メタ言語の不在による言語研究および意味論に関して異なる意見を持ったにもかかわらず、分布仮説の定義にジレンマが発生する点である。第2に、分布仮説の定義記述に4つの不一致が存在し、分布的類似性による意味的類似性というアイデアを共有する現代の自然言語処理の実行段階を反映していない点である。

分布仮説の言語学的検証の必要性という問題意識を背景に、第3章では、分布仮説の起源を Harris に設定した上で、Harris の分布主義を総合的に分析した。分析を通じて、自然言語処理の分布仮説は *Distributional Structure* (1954) 単独では膨大なテキストデータの利用とトークン化方式を説明できるが、分布義的方法論の使う理由と Harris の主張した「意味」に対しては説明できないことが明らかになった。Harris の分布主義の全体を基盤にしても、Harris は言語の意味を定義しにくい概念とみなし、言語の意味を研究することを目標に言語の形式に焦点を当てたため、分布仮説に基づく自然言語処理でも意味に関する定義の問題が残る。結論として、Harris 分布主義は自然言語処理の分布仮説に対する言語学的根幹とは言い難く、Harris 分布主義に基づく技術は根本的な限界を持つ。

第4章では、Harris の分布主義による自然言語処理の言語学的観点からの分析を目標に、多義語分析への適用可能性を提案した。エンベディングの内部構造に対する学際的研究が求められる今、Harris の分布主義的アプローチは、認知言語学のプロトタイプ理論と共通する部分があると共に共起語の活用にもつながる余地がある。

第5章では、まず森山 (2015) のデンドログラム分析を参照に、日本語形容詞「短い」に対する人による意味判断 (西内 2019) を整理した。「短い」は<端から端までの物理的な長さがあり<端から端までの物理的な長さがあり<端から端までの物理的な長さがあり>というプロトタイプの意味を持つ。プロトタイプ意味からは<移動が負担だと感じられない>、<文字数・文章が少ない>、<時間が長く続かない>というメトニミー派生義と、<考えが薄い>、<性格がせっかちである>というメタファー派生義が派生したと考えられる。人による「短い」の意味分類と共起語は、日本語コーパスを通じてまとめることができた。次に、NWJC-BERT 言語モデルによる意味判断 (浅原ほか 2020) が、人による意味判断に従わないことが再度確認された。最後に、人と機械による意味判断の差異を、Harris 分布主義の観点に基づいて分析してみると、2つの仮説が提案されることがわかった。第1に、第3章で指摘した「言語にある意味ではなく、人間活動の特性として存在する意味」を把握できないという分布仮説の限界を証明する仮説である。第2に、日本語形容詞「短い」が構造的な側面に依存する傾向が強く、言語モデルが構造を中心に意味を判断しているという仮説である。Harris の分布主義で2つの相反するような仮説を提案できるのは興味深いことであろう。

結論として、本稿で扱われた手法の限界を認めると同時に、今後 Harris の分布主義に基づく自然言語処理への言語学的分析の重要性を強調した。

論文名

現代日本語における漢語系接尾辞の研究

卒業論文では、カテゴリー化に関する漢語系接尾辞である「系・派・風」の3つを取り上げ、それぞれの前接部分の意味分類、派生語の意味分類、意味同士の相互関係について明らかにすることで、カテゴリー化を表す漢語系接尾辞について考察した。

第1章では、先行研究を概観したうえで、その問題点を指摘した。主な問題点として、大志民(2020)の「X系」に関する意味分類には分類基準に曖昧な点があることや、山下(2015)の「Y系／派」の分類には不十分な点があることを指摘した。

第2章では、山下(2015)の前接部分の分類をもとに、「系・派・風」それぞれの前接部分の意味を分類した。用例は、媒体による「系・派・風」の使われ方の違いなどを考慮し、BCCWJとSNSの「X」の2つを用いて収集した。収集した用例の前接部分の意味を「①具体物」「②行為」「③事柄」「④時空」「⑤様子」「⑥固有名詞」「⑦文や句」の7つに分類したところ、BCCWJでは「③事柄」が多く「⑦文や句」が少なかったのに対し、Xは「③事柄」が多く「④時空」が少ないという結果になった。

第3章では、派生語「～系・～派・～風」の意味分類と意味同士の相互関係を明らかにした。集めた用例と山下(2015)の派生語の意味分類をもとに、派生語を「意味A：帰属先を表す」「意味B：立場・役割を表す」「意味C：嗜好・愛好を表す」「意味D：状態・性質を表す」「意味E：行動・運動を表す」「意味F：思い・性格・願望を表す」「意味G：類似性を表す」という7つに分類した。また、明らかになった派生語の意味同士の関係性を考察したところ、「～系」では意味Cを除く6つの意味が当てはまり、「～派」では意味D・意味Gを除く5つの意味が当てはまり、「～風」では意味B・意味Cを除く5つの意味が当てはまり、それぞれが「具体的なものから抽象的なものへ」などのような派生関係を持ちながら相互に関係しあっているということが分かった。

第4章では、「系・派・風」の比較をしつつ共通点や相違点を明らかにすることでカテゴリー化を表す漢語系接尾辞について考察した。前接部分の比較では、媒体の種類に影響し、BCCWJでは漢字の熟語が、Xでは外来語などのカタカナ表記のことが多いことや、「系」はいろんな意味が前接すること、「派」は文や句のバリエーションが豊富なこと、「風」は具体物が前接する場合が非常に多いことが明らかになった。また、派生語に関してはそれぞれの意味が持つ要素について考えたところ、共通点として「動き・動作」という要素は3つすべてが持っていること、相違点としては「～系」は含まれる要素が多いこと、「～派」は「好み」、「～風」は「雰囲気」という他にはない要素を持っていることを明らかにした。

三卷本『色葉字類抄』の収録語彙研究

―『注好選』内熟語と疊字部の比較を通して―

卒業論文では、三卷本『色葉字類抄』の収録語彙の特徴を探るために、『色葉字類抄』の中でも最大部を占める疊字部と、『色葉字類抄』と同時期の資料『注好選』内の熟語との比較を行った。

比較対象とした『注好選』は、上・中・下の三巻から成り、平安時代後期に成立したと考えられている説話集である。上巻は中国故事、中巻は仏と弟子の事績、下巻には動物にまつわる説話が主に収められている。そこで『注好選』は、①一定の文章量があることからある程度の熟語の用例が得られること②これまでの先行研究で比較対象として扱われていないこと③他の資料との共通説話も多いが位相の異なる語が見られること④『色葉字類抄』と同時代の資料であることの四点から、比較対象資料とした。

第1章では、『注好選』内の熟語を対象とした用例調査を行い『色葉字類抄』との重なりを調査した。人名、地名、場所、書名、時代、を除く漢字二字以上の語を本研究で扱う熟語として採集した結果、『注好選』から1615語の熟語が採集され、『色葉字類抄』疊字部との重なりがみられた語は182語あり、約11%の重なりがあることが分かった。『色葉字類抄』と同時期に成立したと考えられる複数資料とイ篇疊字部との比較をしている藤本（2016）に基づき、用例調査で得られた「イ」を頭文字とする語に焦点を当てた結果、複数の資料での用例が確認されたことから、『色葉字類抄』常時部イ篇には書記的な場面において日常的に用いられていた語が多い一方、他文献での用例が見つからず『注好選』特有語彙或いは漢文特有語彙も収録されていると考えた。

第2章第1節では、第1章で得た用例の中で梵語音訳語に着目して分析した。梵語音訳語が使用されている資料はいずれも歴史を記録する書物であることから、『色葉字類抄』は役人や上流階級などの高貴な身分である程度の基礎学力を有する人を想定して作られた辞書であること、「書記的な場に多く存在していた語」（山田（一九六三））が収録されていることを裏付ける結果となった。

第2節では数字を含む語について述べた。数詞や助数詞については、数字の膨大さから単位を表す語を調べることができれば十分に文章を書く助けとなることから、月名や多用される語のみを辞書に収録した可能性を指摘した。

以上より卒業論文では、『色葉字類抄』成立当時に文字を使用すると考えられた、役人や上流階級などの高貴な身分である程度の基礎学力を有する人を対象として、それらの人々が書記的な場面において日常的に用いるであろう語を多く収録する一方、多用される語ではないが漢文でのみ使用される語彙も収録しているという結論を示した。

「北原白秋『邪宗門』における美意識と宗教観」

本論文では北原白秋『邪宗門』を研究対象とした。本論文は『邪宗門』における白秋の宗教観と美意識、および「邪宗門」という題の意義について明らかにすることを目的としたものである。

第1章では、北原白秋や木下杢太郎ら5人が九州を訪れた際の紀行文『五足の靴』や『邪宗門』の宗教詩から白秋の宗教観について考察を行った。白秋は「天草雅歌」において神などの上位存在に対する呼びかけは一切行っておらず、代わりに切支丹たちへの呼びかけを行っている。「外道の教」とされているキリスト教を守り続ける切支丹に白秋は美を見出したのである。そこにある白秋の信仰は、神々に対してではなく、隠れ切支丹たちへと向けられていた。「天草雅歌」以外の詩においては、弾圧を恐れながらも、新しく日本に入ってきたキリスト教を信仰する切支丹たちの姿が描かれている。白秋はこれらの人々を、南蛮文化に魅入られてしまった人々と重ね合わせて見ていた。『邪宗門』に描かれる切支丹たちは、信仰する教えは違えども、弾圧を恐れる心は共通している。キリスト教ないし切支丹は、崇高で神聖なばかりではなく、残酷で退廃的な面を持ち合わせているというのが白秋の宗教観なのだと結論づけた。

第2章では、詩語や表現から白秋の美意識、また独自のデカダンス思想について考察を行った。『邪宗門』には退廃的なモチーフ・詩語が多い。美と醜、南蛮と日本、欧化主義と国粹主義、神秘と墮落、そして退廃と新規性。このような明治初期に顕著な二項対立が詩のなかで幾重にも展開され白秋独自の世界観と情調を創り出し、我々の脳内で退廃的な調べを奏するのである。白秋は新しく入ってきた南蛮の文化の目新しさだけでなく、その中で廃れていく日本の伝統や人間性に目を向けそこに美を見出したのではないか。また、上田敏『海潮音』にも影響を受けたと白秋自身が語っていることから、『海潮音』の詩とも比較して白秋のデカダンスについて考察を行い、白秋のデカダンスは滅びというよりもそれに向かっていく人々・社会であると結論づけた。さらに、『邪宗門』の詩の特徴は神秘と墮落、美と醜といった対立する概念が両立しながら奇妙な情調を醸し出すところである。ここに宗教美と退廃美との融合が見られると考えた。

第3章では、前章までの考察をふまえ、「邪宗門」という題についての意義について考察を行った。先行研究では「邪宗門」の原義は明治におけるキリスト教の呼称であるとしながらも宗教的意義があると述べているものは見受けられない。しかし、先述したように宗教詩が収められている点、禁教の念が残る中で発刊された点などから宗教的意義とも結びつけて考えた。白秋の美意識の本質は新しく流入された南蛮文化によって退廃していく人々にあつた。こうして新たに取り入れられた文化こそが「邪宗門」といえると考えた。

現代日本語の「のである」＋「のだ」形式の機能と成立条件

本論文では、現代日本語の「のである」に「のだ」が後接した「のである」＋「のだ」形式を対象として、文中でどのような機能を持ち、また、どのような条件で成立するのかという2点について検討した。菊地 (2000)、田野村 (1990)、野田 (1997)、安田 (2014) において「のである」は、「んだ」「のです」「んです」「の」と並んで「のだ」の文体差の一つとされる。よって「のである」＋「のだ」形式は同形式が重複している形式であり、認められないはずである。しかし、同じく「のだ」が重複した「のだのだ」や「のだのである」に比べて容認できるという筆者の内省に基づき、論を進めた。

第1章では、先行研究において「のだ」及び「のだ」の重複使用がどのように見なされているかを概観した。「のだ」は「事情」や「認識」を表し、重複して用いることを容認するか否かという点については両方の意見が見られた。本論文では「のである」＋「のだ」形式を容認する名島 (2002) の、前部「のである」と後部「のだ」とが異なる機能を持ち機能が重複しないため許容度が下がらないという指摘を取り入れた。

第2章では、形式的側面から見た「のである」＋「のだ」形式の成立条件と機能を記述した。収集した例文160のうち、101例が後部「のだ」に接続助詞または終助詞が後接していたことから、主にこの2つの助詞が後接することが成立条件とした。機能を検討するにあたり、まずコーパスを用いて「のだ (んだ)」「のです (んです)」に比べて「のである」の後に接続助詞や終助詞が現れないことを明らかにした。そして、後部「のだ」は「のである」に代わって接続助詞や終助詞との接続を自然にする機能があることを示した。

第3章では、意味的側面から見た「のである」＋「のだ」形式の成立条件と機能を記述した。前部「のである」に前接する内容を、世間の物事について発し手の中で確定している真理、発し手自身について書き手の中で確定している命題の2つに大きく分けた上で、成立条件は前接内容が「根拠のある命題」であることを示した。機能については、前部「のである」が前接内容を根拠のある自明の命題として提出する機能を持ち、後部「のだ」が発し手の心的態度を表す機能を持つと結論付けた。つまり、前接内容は前部「のである」まででひとまとまりになり、そのひとまとまりになった命題に「のだ」が後接する構造を取っているのである。その他、発し手の「感情」「状態」「予定の行動」に続く「のである」＋「のだ」形式は、上記の機能を持つというより発し手の言い癖と考えられる例も提示した。言い癖のように考えられる理由として、発し手の「感情」「状態」「予定の行動」は聞き手や読み手からは疑いのような命題であるため、発し手が根拠のある自明の命題として提出する必要性がないことを挙げた。

第4章では、第1章から第3章までのまとめとして、「【発し手の中で確定している命題 (根拠のある性状)】のである のだ (接続助詞・終助詞等)」という「のである」＋「のだ」形式成立時の構造を図で示した。

中世王朝物語の翻読語にみる漢語受容—複合動詞を中心に—

卒業論文では中世王朝物語のうち『小夜衣』と改作本『夜の寝覚』における複合動詞を抽出し、特に翻読語とみられる複合動詞の分析を行った。これらを通じ平安期王朝物語と中世王朝物語の使用語彙の影響関係や、日本語における漢語由来語彙の定着実態を考察した。

第一章では分析の観点とした「翻読語」について、先行研究における記述を整理するとともに概念規定を行った。呼称の混用の実態や概念規定の多様さを踏まえ、本稿では「翻読語」の呼称を用い「漢語を逐語的に和語へ置き換えることによって誕生した、元々日本に存在しない語・語法を持つ語」と規定した。

第二章では『小夜衣』と改作本『夜の寝覚』の複合動詞を抽出・数量的に概観することで中世王朝物語における語彙の特徴を考察した。調査の結果二作品とも「おもふ／おぼす(思)」をはじめとする心情描写に関わる複合動詞を多用するという平安期王朝物語と同一の傾向が見られた。中世王朝物語は作品の主題のみならず平安期王朝物語と言語基盤が近いことが判明した。他方、『小夜衣』・『改作寝覚』にしか使用例が現れない語も確認され、これらの語彙には①接頭語を伴うものや②三語以上の割合が多いという傾向が認められた。

第三章では、翻読語とみられる複合動詞の分析を行った。『小夜衣』・改作本『夜の寝覚』の双方で平安期以前から用例のある翻読語が多く確認されたことから、中世王朝物語における高頻度の翻読語の定着実態を指摘した。また同一の漢語が元になったと考えられるものの「きえうす／うせきゆ(消失)」のような転倒形や、「いきいづ／おひいづ／むまれいづ(生出)」といった複数の翻読例がある語が見られた。先行研究の指摘を踏まえ、漢語由来の語彙を和文に馴染ませようとする意識が翻読語の多様なバリエーションが生み出された背景にあるとした。

第三章後半では翻読語認定の一基準となる複合動詞の同義的結合に着目し、作品毎に全複合動詞に占める同義的結合の複合動詞の割合(同義比)を算出、比較した。二作品とも平安期の和文作品と同程度かそれ以上の同義比であったが、中でも改作本『夜の寝覚』は同義比が三・三%と高く鎌倉期成立の『宇治拾遺物語』・『平家物語』に近い数値となった。改作本『夜の寝覚』に関しては鎌倉期の諸作品との言語基盤の近さを示唆する結果となった。

分析を通じ中世王朝物語は平安期王朝物語の性質をよく継承していることが示された反面、平安期には見られない語彙が少なからず確認された。また翻読語の観点からは漢語由来の語彙の多様な受容実態が観察でき、鎌倉期の作品との共通性も見出された。以上の点から中世王朝物語を対象とした語彙研究の進展が中世日本語の新たな姿を提示することに繋がると結論づけた。

現代日本語における〈振る舞い〉を表す接尾辞の研究

卒業論文では、現代日本語の〈振る舞い〉を表す接尾辞について「ぶる」「がる」「めく」「めかす」「然」を取りあげ、前接成分に着目してそれぞれの接尾辞のはたらきを分析し、各接尾辞の比較を行った。

第1章では先行研究の問題点を挙げた。〈振る舞い〉を表す接尾辞の先行研究は「ぶる」「がる」「めく」を対象としたものが見られたが、「めく」の派生である「めかす」、漢語系接尾辞の「然」について詳しく言及している先行研究はなく、意味が類似した接尾辞としてそれぞれのはたらきを整理し、共通点・相違点を明らかにする必要があることを指摘した。

第2章では「ぶる」を取りあげた。主に名詞と形容動詞の語幹を前接成分とし、形容詞の語幹につくことは稀である。プラス評価の前接語の場合、話者が動作者の言動や行動を見て「(○○ではないが)○○のように振る舞っている」と主観的に評価する時に用いられるため文全体が批判的な意味になりやすく、マイナス・中立評価の前接成分では前接成分の意味や話者の評価の軸次第で文全体において批判的な意味が発生する場合としない場合があることが分かった。

第3章では「がる」を取りあげた。主に形容詞・形容動詞の語幹を前接成分とし、特に感情・感覚形容詞につきやすい。人称に関わらず動作者の心情が言動や態度に現れている様子を話者が第三者視点で捉えた表現であることが分かった。

第4章では「めく」を取りあげた。主に名詞と形容動詞の語幹を前接成分とする。文全体の評価を変えるはたらきはなく、動作者(対象)が前接成分のような状態になっているという話者の認識を表す。また、前接成分そのものの状態ではないことを話者が表すことによって曖昧さが生まれる〈曖昧化〉があることが分かった。

第5章では「めかす」を取りあげた。派生元の「めく」と同様に名詞と形容動詞の語幹を前接成分とする。前接成分のような特徴に当てはまる動作者の言動や様子を話者が捉えて、単純にそのように振舞うという意味を「めかす」で表していることが分かった。

第6章では「然」を取りあげた。主に名詞を前接成分とし、話者が動作者(対象)の言動や見た目などの様子から前接語の状態そのものまたは限りなく近い状態であると捉えている表現であることが分かった。

第7章では2～6章で得られた接尾辞の主なはたらきについて整理・比較を行った。「ぶる」「がる」ははたらきの違いから前接成分の重なりは避けられ、「めく」「めかす」「然」は「ぶる」ように話者が動作者の様子を評価し、「(○○ではないのに)○○のように振る舞う」という意味で用いられる場合もあることが分かった。

以上のように、卒業論文では先行研究において関連を言及されることが少なかった〈振る舞い〉を表す5つの接尾辞について分析を行い、共通点・相違点を明らかにした。

漢語受容過程における意味・用法の変化について

- 一字漢語動詞形成漢字を中心にして -

平安・鎌倉期において、漢語サ変動詞は和文の中で使用されるうちに、元々の漢語から派生した新たな意味・用法が変化しているものも現れている。本論文では、漢語が和化していくなかで、和化した漢語の使用によって正格の漢文に漢語を用いる意識にも影響を与えているのかについて検討することを目的とする。

そのために、先行研究で中古の物語作品において一般的に使用されていると指摘された「具ス」の形成漢字「具」について、公的・美文的性質が強く、日本人の著した正格漢文といえる『本朝文粹』を基に調査・検討した。『本朝文粹』における「具」の用例数は計四四例であったが、手本となる美文を蒐集した資料であるため、日本語書記の標準的な姿を反映していると考え、考察を進めた。

四四例のうち、副詞の用法が二六例と多く、動詞が一四例、名詞が四例で、『大漢和辞典』に記されていた数詞・人名としての用法は見つからなかった。このうち、副詞としての用法は同じ語と共起することが多く、二回以上同じ語と共起しないものは八例にとどまったため、ある程度共起する漢字は決まっていると考えられる。

動詞については、『大漢和辞典』の意味記述を基にしてまず自動詞と他動詞に分類し、詳細に検討を行った。そのように分類したとき、主体と動作をする相手がどちらも人間なのはすべて他動詞の場合であり、逆に自動詞の場合は全て非生物主語の文であることがわかった。他動詞の場合は作品分類「勅答」「官符」にみられ、天皇や太政官から下の立場の人間に向けての使用であり、漢語サ変動詞の先行研究で述べられていた主観的表現や上下関係を含む対人関係が表される場合に使用されるという指摘とも合致している。この特徴は、サ変動詞化された「具」を対人関係などで主に用いていたために、その特徴を無意識的に当てはめてしまったからではないかと考えられる。

また、使用される動詞としての「具」の読み・意味を検討すると、そのなかにも和文的な要素とみられるようなものがあつた。『本朝文粹』における「具」の用例のうち、数例には『大漢和辞典』における意味記述では文意が通りにくいと考えられるものが存在する。しかし、『類聚名義抄』での「具」の読みのうち、『大漢和辞典』の意味記述とは離れた読みがいくつか確認でき、訓読の際にその読みの使用により文意の通りやすい文になるのではないかとみられた。漢文では本来用いられないような意味を想定して使用していたのであれば、これも和文での「具」の常習的な利用によって漢字自体への使用感覚に影響を及ぼしていたといえる。

現代日本語の複合動詞における屈折接辞の生起位置 —— 受動態を中心に ——

本稿では、主に後項動詞「ちらかす」「まくる」に対し多様な前項要素が現れる複合動詞群について、屈折形態素 受身-(r)are、使役-(s)ase、主に受身の生起位置の選好に、いかなる要素が関係しているかを分析することを目的とする。

1 章では、複合動詞にまつわる先行研究、影山(1993)と姫野(2018)による分類を整理した。影山(1993)は、複合動詞を A 類・語彙的複合動詞、B 類・統語的複合動詞に大別し(影山 1993: 75-76)、前項要素のもつ 5 つの差異(代用形「そうする」、サ変動詞、主語尊敬語、受身形、重複構文「飲みに飲む」)によって弁別できる(影山 1993: 92)とする。影山(1993)は、前項要素が受動化できるかは後項動詞によって定められると述べている。(影山 1993: 167)。また、姫野(2018)の複合動詞の分類においては、B 類相当の後項動詞①は前項動詞に使役形態素が付加できるが、語彙的複合動詞相当の後項動詞②は使役をとれないと述べる。(姫野 2018:7)

2 章では、前項に屈折形態素が付加可能である場合に、前項と後項のどちらに接続しやすいかについて調査・整理を行った。2 章 1 節では、後項動詞「ちらかす」「まくる」および、屈折形態素の 受身-(r)are、使役-(s)ase を用いて、屈折形態素が複合動詞の前項・後項どちらに接続しやすいかを調査した。結果、複合動詞 X チラカスにおいては、後項動詞に受身-(r)are、使役-(s)ase が付加する傾向が強かった。一方、複合動詞 X マクルにおいては、受身-rare は後項動詞に、使役-(s)ase は前項要素に接続する傾向が強いことが分かった。2 章 2 節では自動詞/他動詞 51 組を用いて、自動詞/他動詞において屈折形態素の生起位置に偏りがいないか、後項動詞「まくる」「ちらかす」「たおす」と受動-(r)are・使役-(s)ase に関して調べた。結果、自動詞より他動詞のほうに屈折接辞が付加しやすく、複合動詞 X マクルには屈折接辞-(r)are、-(s)ase が付加しやすく、X チラカス、X タオスは付加しにくいこと、屈折接辞が前項と後項のどちらに接続するかは自動詞と他動詞であまり差がないことがわかった。

3 章では、影山(1993)による統語的・語彙的複合動詞の性質から、前項要素の受動化、サ変動詞、重複構文「飲みに飲む」、主語尊敬語化の 4 項目による統語性テストによって、今回得られた複合動詞群が B 類であるか否かを診断した。1 節では前項動詞の受動化が可能かを見た。前項が受身になりにくい複合動詞 X チラカスには A 類が多く、前項受身が可能である複合動詞 X マクルは B 類である可能性が高い。2 節では前項動詞にサ変動詞がとれるかを見た。前項にサ変動詞を取れない複合動詞 X チラカスは A 類であり、サ変動詞をとれる X マクル・X タオス・X カケルは B 類である可能性が高い。3 節では、前項で受身がとれるものに対し「飲みに飲む」型動詞重複が可能であるかを見た。結果、約 32~45%の動詞で重複構文が可能であることが分かった。4 節では、3 節でみた動詞重複が可能な動詞すべてが、主語尊敬語オ V1 ニナリ V2 形をとらない B 類であることがわかった。

論文名

村上春樹『風の歌を聴け』論—デタッチメントとコミットメントの混在—

本論文では村上春樹『風の歌を聴け』の主人公「僕」の人物造型について論じた。

加藤典洋は書法／態度としてのデタッチメントを提唱し、初期作品には書法としてのデタッチメントのみが見られるとしている。それに対し、加藤のいう態度としてのデタッチメントも見られるのではないかという疑問を持った。そのため、本論文では加藤に反対の立場を示しつつ、『風の歌を聴け』を対象とし、主人公の人物造型を改めて論じることを通して、テキスト本来の特徴を明らかにすることを目的とした。

第三章では態度としてのデタッチメントがテキストで見られることを検証した。テキストの構造に注目した結果、19章を境に物語が変化していることがわかった。また、19章はテキストの主題が語られる7章と同様の特徴を持っていることから、同じようにテキストの主題が隠されていると考えた。そして内容の分析の結果から、その主題とは「仏文科の女子学生」の死であることがわかった。つまり、『風の歌を聴け』の主題はコミュニケーションの問題と、「仏文科の女子学生」の死の二つである。そして、それらは「僕」の人物造型にも大きく関わっている。1970年8月の「僕」はその年の春の「仏文科の女子学生」の死から行動や思考に影響を受けている。それゆえ「僕」には加藤が態度としてのデタッチメントの特徴として挙げた「喪失」や「欠落」がインプットされており、『風の歌を聴け』の「僕」にも加藤のいう態度としてのデタッチメントが見られると結論づけた。

第四章では、1970年8月の「僕」のコミュニケーションの様子を取り上げ、「僕」の人物造型について論じた。「僕」には内面を語らず、他者の内面に踏み込もうとしないデタッチメントの態度と、結果に関係なくコミュニケーションを試みる態度の二つの態度が併存しており、それは1970年8月の「僕」の態度が1978年の「僕」の態度へと移行するからだと結論づけた。1970年の「僕」は、他者と距離を取りたい一方で他者に関わろうともする、デタッチメントとコミットメントが混在した存在なのである。

以上から、「僕」は「仏文科の女子学生」の死の影響を受け、「喪失」や「欠落」といった態度としてのデタッチメントを持つ人物として描かれていると結論づけた。また、「僕」は他者と距離を取ろうとする態度とコミュニケーションを取ろうとする態度の二つを持ち合わせ、換言すればデタッチメントとコミットメントの態度が混在した状態といえる。それらが混在した中で、近づいては離れることを繰り返し、他者との距離を探ろうとする人物として語られているのである。

Notes on *Tough*-Constructions in English

この論文では、英語の *Tough*-adjective は、少なくとも2つのタイプで現れることに注目し、その2つの構文が異なる構造特性を持ちうるか、またこれらの構文の不定詞節がどの位置にあるのだろうかを研究する。その構造の1つ目は文末の不定詞節と意味的に関連付けられた虚辞の「it」を主語として含むものと、2つ目は埋め込まれた不定詞節の目的語として解釈される虚辞の意味を持たない主語である。

本研究では、これらの構造を NTMC における不定詞節が構造上のどの位置を占めているか、また TMC における不定詞節では構造上のどの位置に現れるかの観察から2つの構文が異なる構造特性を持ち、これらの構文の不定詞節が全く異なる位置にあることを示していく。

実際に、観察していくと *Tough*-adjective が NTMC において不定詞節と構成要素を形成していないこと、特に不定詞節が NTMC において AP/PAP 外部の位置を占めていることが判明する。また、TMC の不定詞節は AP 内部であり、NTMC の不定詞節は AP/PAP 外部であることが判明する。以上にて、2つの構文が別物であることが明らかになってくる。

さらに、*Tough*-adjective の主語が θ 位置を占め、これらの構文の不定詞節には別個の θ 役割が割り当てられていることを提案する。

結論として、

- ① TMC と NTMC の不定詞節は、まったく異なる位置から生じていること。
- ② TMC/NTMC の「主語位置は θ 位置ではないと仮定する主張に強く反対することができる

ことが分かった。これら2つの結論が正しい場合、

- (A) TMC と NTMC は構造的に類似している
- (B) TMC/NTMC の主語位置は θ 位置ではない

と仮定する主張に強く反対することができるという結果が導き出すことができた。

日本語における仏教語彙受容

卒業論文では、日本語における仏教語彙受容のあり方の一端を示すことを目的とし、「娑婆」という仏教語彙が一般語彙化する過程を調査し、背景の考察を行った。特定の仏教語彙の変遷を示す先行研究は片山（一九七〇）、郡（二〇〇一）、土淵（一九九九）複数存在するものの、研究対象の単語の選定基準が不明瞭である事、仏教語彙研究でありながら人々の宗教意識を絡めた考察を行っていないという問題点が挙げられる。本研究ではこれらを踏まえ、研究対象語の選定に当たって基礎調査を行い、「娑婆」の一般語化の背景の考察部分では宗教意識と関連づけた考察を述べている。

第一章では基礎調査の方法と結果を記している。研究対象語選定の基準としては、①仏教語・一般語の二つの意味を有していること、②梵語音訳語であること、③用例数が多いこと、④仏語と一般語の意味乖離が大きいこと、の四点を設定し、日本語供御大辞典や日本語歴史コーパスを用いて語の選定を行った。

第二章では、娑婆の用法変遷の分析結果、そこから類推した変化の背景についての考察を述べている。本研究では、「娑婆」に対応する世界を通時的に比較することで娑婆の変遷の分析を行った。その結果「娑婆」に対応する世界が時代毎に異なっていること、対応する世界と娑婆の正負の関係が変化していることが明らかになった。対応する世界は、平安・鎌倉時代は「極楽」、室町時代は「地獄」、江戸時代は極楽地獄を意識しない漠然とした「死後の世界」や「遊郭」、明治時代は「監獄」と変化している。正負の変化については、「極楽」と「人間世界」という「正」に対する「負」の構造から、「地獄」と「人間世界」、「監獄」と「外の世界」という「負」に対する「正」の構造に変化している。

そうした変化の背景の考察として、本研究では、①人々の生活の質の向上に伴う「娑婆」の位置づけの向上、②「娑婆で見た弥二郎」という諺に表れる僧侶の宗教意識の変化と遊郭・牢獄との対応への発展、③人々の宗教意識の薄れによる「娑婆」と宗教の乖離を指摘した。

本来「煩惱をすてた悟りの世界に対する衆生の苦しい世界」といった意味であった「娑婆」は、平安時代には「極楽に対する人間世界」、室町時代には「地獄に対する人間世界」、江戸時代には「死者の世界に対する生者の世界」「遊郭に対する外の世界」と時代毎に意味を変え、室町時代からは「娑婆」と対応世界の正負の逆転も起きている。そしてその背景には生活の変化、宗教の変化、言葉の変化など、様々な変化が存在するということが本研究をとおして判明した仏教語彙受容のあり方の一端として確認された。

Jane Austen, *Persuasion* 研究

本論文では、Jane Austen (1775–1817) の *Persuasion* (1818) において Anne Elliot が物語を通じて精神的成長をした過程と Austen の作品から読み取れる恋愛観を考察した。

第1章では、ヒロインである Anne が物語を通じてどのような精神的成長を遂げたのかを考察した。Anne は Frederick Wentworth と婚約破棄した8年前、親代わりである Lady Russell の説得を聞き入れ、自分の選択を正当化しようとすることで自身を保っていた。しかし、その後は Uppercross や Lyme、Bath での出会いや出来事を経て、Wentworth との今後の関係にかかわらず、彼への愛情を持ち続けることで自身は幸せになれると思いつまに成長していることを明らかにした。

第2章では、結婚を題材にした小説を多く執筆した Austen が生きた18世紀後半から19世紀初めのイギリスの社会情勢と当時の結婚観について分析した。この時代のイギリスは世界最強の海軍を有する覇権国家としての地位を確立し、産業革命により国力が増強しており、ヨーロッパ経済の中心としての役割を担っていた。女性は男性に隷属する存在として求められ、職を持つことが困難な女性にとって結婚は将来選択の手段であったことを指摘した。家父長制から個人主義の考えに移行しつつあった時代だが、裕福な階級層では両親の要望が反映されやすいことも確認した。

第3章では、*Persuasion* に描かれる他の夫婦（妹の Musgrove 夫妻や Smith 夫妻など）と *Pride and Prejudice* に描かれるカップル Elizabeth Bennet と Mr. Darcy について分析し、これら2作品から読み取れる Austen の恋愛観と彼女が *Persuasion* に込めた思いについて考察した。妥協的な結婚をした Mary や若くして結婚した Mrs. Smith は幸せな夫婦として描かれていないのに対し、最初は互いに偏見を持ちつつも時間をかけ相手と向き合い、純粋な愛情から結婚した Elizabeth と Darcy は幸せな夫婦として描かれていることを読み解いた。また *Persuasion* の中でも若い男女が結婚したいと思った時には初志を貫徹すべきだと書かれていることから、Austen は結婚において相手に対する純粋な愛情や、周囲に惑わされることなく結婚したいという強い意志が重要だと考えていると考察した。

以上より、Anne は若くして結婚するのではなく8年の年月をかけ新たな出会いや経験を積み、自身と Wentworth に向き合ったことで幸せな道を掴んでいる。Austen は良い過程をたどった人物を幸せに描いていることから、結婚に関して上辺の要素ではなく、純粋な愛情と過程が大事だという恋愛観を持っていると本作では結論付けた。

現代日本語形容詞の口語的活用

本論文では、親しい間柄での日常会話や SNS 上の投稿に見られる形容詞のくだけた語形変化を「口語的活用」と名付け、活用の有無と発音、表記の調査結果を記した。調査対象としたのは、松下(2011)に掲載されている形容詞のうち、一般語彙レベル(松下(2011)で「全レベルにわたって日常生活を意識して考えた重要度のランク」とされているもの) GL_01K から GL_20K までの 333 語である。以降、一般語彙レベルを「重要度ランク」と呼ぶ。

まず、先行研究の酒井(2018)を踏襲し、対象の形容詞を末尾の「い」の直前の音ごとに a 型、i 型、u 型、o 型の 4 つに分類した。次に、口語的活用が対象の形容詞に確認されたか否か、確認された場合はその形と用例数を表に記した。本論文では、末尾の「い」と直前の音が[ee]または[ii]となる代償延長形、語幹で終止するまたは語幹の後に促音を付加する短縮形、語幹内のある一ヶ所のモーラ間に促音を付加する促音挿入形、語幹内のある一ヶ所のモーラ間に撥音を付加する撥音挿入形、促音挿入形または撥音挿入形と代償延長形が融合した複合形の 5 種類の活用を扱った。

促音挿入形を除く口語的活用において、形容詞の型にかかわらず、重要度ランクが高いほど活用の確認された語の割合が高く、重要度ランクが低いほど割合が低い傾向がみられた。促音挿入形では、a 型、i 型、o 型は他の口語的活用と同じ傾向がみられた。u 型は、重要度ランクにかかわらず、「手厚い」「歯痒い」「物憂い」を除くすべての語に活用が確認された。

上記の傾向に反し、重要度ランクが GL_10K 以上でも口語的活用が確認されなかった語がある。例えば、母音が 3 以上連続する「淡い」「青い」は代償延長形が確認されなかった。活用形が「暗い」と同音の「くれえ」になると推測される「黒い」にも代償延長形が確認されなかった。原則終止形と連体形にしか活用せず、活用の自由度が「よい」よりも低い「いい」には短縮形が確認されなかった。

撥音挿入形の有無を決定づける要因には、重要度ランク以外に、第二モーラの子音がある。第二モーラの子音が無声子音[k][s][t]である語には、撥音挿入形が確認されない傾向がある。GL_05K 以上に属する「少ない」「美しい」「低い」ほか 5 語と GL_16K の「せこい」には撥音挿入形が確認されたものの、第二モーラの子音が有声子音である語に比べて用例数が限られている。

5 種すべての口語的活用が確認されたのは、「早い」「長い」「甘い」「つらい」「からい」を含む全 39 語であった。このうち 31 語は重要度ランク GL_05K 以上に属する。重要度ランクの高さ以外の特徴として、味覚・触覚・感情を表す語が多いことが挙げられる。

5 種すべての口語的活用が確認されなかったのは、「力無い」「程近い」「宜しい」「易しい」「親しい」を含む全 18 語であった。このうち、「宜しい」を除くすべての語が GL_06K 以下に属する。重要度ランク以外の特徴として、述語として使用されにくい点が挙げられる。

キリシタン資料における撥音便とウ音便の混在 —同時代の口語資料と比較して—

本稿では、キリシタン資料における音便の現れ方の特徴を明らかにするため、室町時代の口語資料群におけるバ行・マ行四段活用動詞の撥音便およびウ音便の混在の実態を調査した。本稿では先行研究群を踏まえ、①キリシタン資料の比較対象として抄物のほかに狂言を加え、②抄物のなかでもこれまで深く調査されてこなかったものを比較対象とし、③全体にわたって同一の語群を調査対象にすることとした。以上を通して、キリシタン資料の音便の特徴を捉え、また「室町時代の口語資料」の一つとしてのキリシタン資料を捉え直すことを目的とした。

第一章では、調査の軸となるキリシタン資料として『天草版平家物語』『天草版伊曾保物語』および『金句集』解釈文(口語部分)を調査した。結果として、『天草版伊曾保物語』の「羨みて」一例を除いてすべて音便化していた。また多少の例外や音便形の混在は見られたものの、【語幹末ウ列音一撥音便、語幹末アイエオ列音一ウ音便】の原則が全体を通して見られた。なお、『金句集』本文(文語部分)は全例が撥音便となっていた。

第二章では、キリシタン資料の比較対象として『虎明本狂言集』を対象とした。結果として、全体を通して非音便形が非常に多く見られた。文種ごとに音便化率をみた際、【会話：90.2%、会話・韻文：63%、ト書き：46.4%、引用・会話指示：100%】という結果となった。音便化率の高さはト書き<会話・韻文<会話<引用・会話指示の順となっており、口語の度合いが高まるほどに音便化率も高まっていると考えられる。また、撥音便とウ音便の混在も非常に多く見られ、キリシタン資料ほどの厳密な住み分けはなされていないように思われた。

第三章では、キリシタン資料の比較対象として『蒙求抄』を対象とした。多少の例外や音便形の混在は見られたものの、【語幹末ウ列音一撥音便、語幹末アイエオ列音一ウ音便】の原則が全体を通して見られた。「縄ヲ結テ」(4, 14, ウ)や「相伴ニ呼タソ」(3, 64, ウ)のように音便形が判別できない用例はあったものの、判別できる用例内ではキリシタン資料と同程度に撥音便とウ音便の住み分けがなされているように思われた。

第四章では第一章から第三章を踏まえ、また適宜先行研究を参照しつつ、キリシタン資料における音便の特徴を考えた。キリシタン資料は他資料に比べて音便の住み分けが厳密になされていること、それはキリシタン資料が備える「規範性」に由来している可能性があることが明らかになった。また、キリシタン資料は『虎明本狂言集』や『蒙求抄』と共通の言語基盤をもっていることを指摘した。

論文名 現代中国語“弄”の意味と機能

現代中国語の“弄”は、「手でいじる。」という意味を基本義とし、具体的な動作から抽象的な動作まで幅広く表現することができる。しかし抽象的な動作を表す“弄”は辞書類でははっきりと定義づけられていないため、日本語を母語とする中国語学習者にとっては理解しづらい。本稿は、“弄”の前後にくる成分による“弄”の意味の違いを確認するとともに、抽象的な動作を表す“弄”について説明を施すことを目的とする。

3節では“弄”に後接成分がついた形を“弄X”とし、Xにくる成分として名詞、形容詞、動詞を取り上げ、それぞれの場合での“弄”の意味合いの違いについても考察を行う。“弄+名詞”の場合、“弄”は「手でいじる。」、「何とかして手に入れる。」、「もてあそぶ。」、「する、やる。（具体的な動作の代わり）」などの意味を表し、具体的な動作を表す動詞として機能する傾向が強い。これに対して、“弄+形容詞”や“弄+動詞”の場合は、“弄”はあえて言う必要もないような抽象的な動作を表したり、後に続く状態を表す形容詞や動詞に注目させるよう機能したりする傾向が強い。また形容詞や動詞に他動性を持たせる働きももつ。そしてこういった場合の“弄”は、動作を表すというよりも、「働きかけ」を表す“弄”であるといえる。本稿ではこのように「手でいじる。」という基本義が失われている様を「漂白化」と呼ぶこととし、この「漂白化」が強いほど意味の抽象度も高くなると結論づけた。さらに4節では、“弄”が主に動詞の後ろに後接する“X弄”についても考察する。この“X弄”は、意味がプラスでもマイナスでもない中立的なものと、マイナスなものに分類することができるが、どちらも「手でいじる。」という“弄”の基本義から派生したものと考えられる。中立的な意味の“X弄”は全体で「いじる。」やそれに関連性のある動作を表すが、Xによってその動作がより具体的に表現されるといえる。マイナスな意味の“X弄”は抽象的な動作を表す傾向が強い。必ずしもX自体にマイナスな意味があるわけではないが、事態に対しての否定的な表現として用いる場合に、“X弄”全体でマイナスな意味が生じると考えられる。こうした考察を経て本稿では“弄”について、次のように結論づけた。まず、“弄”は基本義「手でいじる。」を出発点とし、手の動作に関わる具体的な動作から抽象的な動作まで表すことのできる汎用性の高い動詞といえる。非常に特徴的な点として、は基本義がほとんど失われた“弄”は「働きかけ」を表す機能を有し、それによって後続の形容詞や動詞に焦点をあてたり、他動性をもたせたりすることができる。“X弄”の形で形態素として用いられる場合、抽象的な動作はマイナスな意味を表すが、“弄”やXに元々マイナスな意味があるのではなく、事態を否定的に言い表そうとする過程でマイナスな意味が生じるといえる。

平安鎌倉期における疑問表現の形式 ——『三宝絵』を中心に——

本研究では平安鎌倉期における疑問表現について、同内容かつ文体の異なる伝本をもつ『三宝絵』を用いて使用されている形式を調査し諸本の特徴を明らかにすること、原拠となった資料や後の資料と比較を行い形式や表現に違いがみられるかを調査することを目的とした。

第一章では、『三宝絵』の文体の異なる各伝本で用いられている疑問表現について用例を分類し、その特徴を分析した。真名本では「問い」と「反語」で「可」が使用され、「反語」の文末には助字を使用する形式が多用されていた。漢字片仮名交じり本では「問い」の意味において文中の「カ」や文末の「ゾ」の形式が多用され、「疑い」と「反語」は同様の形式が使用される傾向にあった。平仮名本では漢字片仮名交じり本と同様に文中の「カ」や文末の「ゾ」の形式が多く見られ、特に文末の「ゾ」が「問い」の意味で使用されていた。

第二章では、第一章で行った諸本の分析を踏まえ、諸本で異なる形式が使用されている箇所について比較を行った。漢字片仮名交じり本と平仮名本では、「疑い」の意味において平仮名本でのみ文末に推量の助動詞の使用が見られた。漢字片仮名交じり本と真名本では「可」の使用において共通性が見られるものの、真名本では助詞が表記されない例が多いため、今回の分類においては異なる形式となる例が多く見られた。真名本と平仮名本では「可」を使用する形式や「況——哉。」の形式において両者は一致する用例が多く見られた。これらから、真名本は平仮名本を漢文調に改めて書かれたものであると考えられる。

第三章では、『三宝絵』とその原拠となった『日本霊異記』及び後の資料として同内容の説話を持つ『今昔物語集』との比較を行った。『日本霊異記』との比較においては、「耶」や「矣」といった助字の使用に違いが見られた。一方、『今昔物語集』との比較においては、同内容箇所の形式は概ね一致しているものの、一部『三宝絵』では「反語」が用いられている箇所が『今昔物語集』では否定の語を使用して表現されており、『今昔物語集』はより直接的な表現を使用している可能性があると考えた。

これらのことから、『三宝絵』の諸本について使用されている疑問表現の形式は一致する例も多く見られるが、助動詞の使用に違いがあることが分かった。また、『日本霊異記』及び『今昔物語集』との比較からは文末の助字の有無や主張の表現方法に違いがあることが分かった。これらの『三宝絵』の諸本の比較及び『日本霊異記』、『今昔物語集』との比較から、疑問表現の特徴は文末に表れると考えられる。文末の表現を基にしたより詳細な分類や同時代の他の資料との比較は今後の課題とした。

卒業論文要旨

卒論題目：坂口安吾の美意識

坂口作品における美の表現は特徴的な描かれ方をしていることが見受けられる。山賊と都の美しい女の葛藤が描かれた『桜の森の満開の下』の中では、「桜の花の下から人間を取り去ると怖ろしい景色になる」とあり、日本の春の美しい景色の象徴とされている満開の桜の下の空間を「怖ろしい」と表現し、その桜の森の満開の下という空間がどこことなく作品内の登場人物である美しい女に似ているとされている。『日本文化私観』では、日本の文化の代表として伝統的建造物である法隆寺や平等院鳳凰堂と比較して、一切の美的考慮のない刑務所や工場の姿に美しさを認めている。坂口安吾の美意識について、坂口自身も「私の好む風景に一般性がない」（『石の思い』）ことに気づいている。

本稿では、坂口が美に就いて直接的に語っている作品をいくつかとりあげ、坂口の一般的なものとは違う美意識を考察し、それらの作品からわかる坂口の美意識を踏まえて『桜の森の満開の下』の読解をした。

第1章では坂口安吾の、従来の日本の伝統的な美意識についてどのように捉えているかについてまとめ、第2章では具体的に坂口安吾が美しいと感じる風景を作品の中から探り、その共通点を考察した。第3章では、第2章で坂口が美しいと感じる具体的に挙げた例をもとに、坂口の美意識についてさらに詳しく考察し、第4章では、前章までで考察した坂口の美意識が『桜の森の満開の下』の中でどのように取り込まれているのかを考察した。

坂口安吾の美意識とは、歴史や伝統にのっとりたものでも、世間一般が掲げる美意識や道徳といった架空の観念ではなく、めいめいが直接感じたことを独自に解釈し、そのうえでそれぞれの誠実な生活をおくることである。坂口の美意識を踏まえ、『桜の森の満開の下』の解釈をまとめる。美しい女は、山賊にとって山賊が初めて直面した美しいものであり、その憧れから女を「美」という観念へと昇華させ、桜の下という空間に重ね合わせることで桜の下の怖ろしさから逃避した。恐怖を架空の観念に預けることで、自分で考えることや悩むことを放棄し逃避できるからである。桜の下という空間は、矛盾した叙述からわかるように特異な時空間であることを表しており、桜の下の恐怖は時間概念（永遠の美はないこと、女の老い）であると結論付けた。

J.K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone* 研究

本論文では、J. K. Rowling によって書かれた *Harry Potter* シリーズの第一作目である *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (1997) から、作中に描かれた魔女狩りとの共通点を明らかにし、本作に寄せられた批判と魔女狩りの関連性について考察した。

第1章では、本作と15世紀から17世紀に起こった魔女狩りにおけるあらゆるイメージとの関連性があることを指摘した。まず、魔法界の動物の代表としてふくろうを例に挙げ、ふくろうが **Muggle** にとっては凶鳥として描かれている一方で、魔法界では吉鳥として描かれていることを示した。次に魔法使いが何気なく使う動物変身の魔法が **Muggle** にとっては恐ろしい魔法として描かれており、それは魔女狩り時代の魔女のステレオタイプと合致していることを明らかにした。最後に空中飛行の魔法について、魔女狩り時代に魔女を見分ける手段であった空中飛行技術が、魔法使いのアイデンティティとしての役割を果していると解釈した。本作の描写と魔女狩り時代の「魔女」のイメージとの合致から、魔女狩り時代の「魔女」のイメージの根強さを指摘した。そしてこのことは本作を読み、魔女狩り時代において告発された害を及ぼす魔女を連想する人々を生んでいる可能性を示唆している。

第2章では、この物語における人間関係は、魔女狩り時代の魔女と民衆の関係、さらに魔女と悪魔の契約関係と類似していることを検証した。はじめに **Muggle** が魔法使いに対して行う拒否反応と魔女狩り時代の民衆が魔女（と疑わしき人物）に対して行う拒絶には、自身と異なる存在に対して排除しようとする姿勢という観点から類似性を見いだした。つぎに、Voldemort が Quirrell の頭部に寄生し、合体したという描写は、魔女狩り時代に悪魔が人々を魔女にするために行った性交という契約手順と通底していることを指摘した。

第3章では、前章までに明らかにした魔女狩りとの共通点をもとに、主にアメリカで行われた本小説のシリーズに対する批判理由を精査した。その結果、「オカルトや悪魔崇拝を助長する内容を含む」という意見が主な批判理由であると確認した。悪魔崇拝を助長する内容への批判は、魔女狩りが実在したという歴史から続くものである。本論文では魔女狩りはあくまで過去のものであるという前提のもと執筆してきたが、魔女狩りの研究者は魔女狩りやそれに基づく魔女信仰は現代にまで続いていると指摘する。実際に魔女狩りの歴史があった地域では、不思議な力を持つ人が民衆に悪さをすることができると信じる人が一定数存在することが分かった。さらに、新約聖書や黙示録には、魔術は総じて悪であるとの記載があり、魔術の存在を信じる敬虔なキリスト教徒が聖書の内容にしたがいこの小説を批判していると結論付けた。

以上のように本論文では、本作が魔女狩りの歴史と類似する部分があることを指摘したうえで、熱心な批判は魔術の実在を信じ、聖書の記載に則って魔術を根絶しようとする敬虔なキリスト教徒によるものであると結論付けた。

『枕草子』の研究-日記的章段における表現方法について-

卒業論文では、『枕草子』日記的章段における表現方法の研究を行った。第一章では「和歌」に関する考察を行った。清少納言にとっての和歌とは何か、各章段の本文を参照することで、詠歌拒否発言の裏にあった理由・葛藤や、文章の節々に表れる和歌への積極的な向上心を読み取ることができた。その結果「和歌は好きだが、特定の場面においては、周囲との比較・歌人である父や曾祖父の存在によって、緊張感を感じていた」という、より詳細な見解をまとめられた。また、長徳二年ではなく、前期・後期章段を分ける長徳元年を境に自詠歌の用い方を変えていることや、章段内の「場」又は散文構成の中で効果的に自詠歌を用いていることから、和歌を記すにあたって何らかの工夫を加えた章段が多くあることが分かった。従って、『枕草子』内の自詠歌は、単なる秀句自慢や記録としての意味を持つものではなく、場面や会話と結びつくことによって、章段の内容を深化させ、読者に印象を与え、作品全体の魅力を高める役割を果たしていることがいえる。第二章では「時間」と「場所」に関する考察を行った。「時間」という観点では、1つの章段内で、各エピソードを時間が逆行するように構成していくことで「ある人物との思い出を個人的な角度から総括的に記す」という効果があると結論づけた。また「場所」の観点では、暗い印象を持つ「職」が舞台となる章段を取り上げた。職時代において、その当時も定子後宮に変わらずあった華やかさ、さらに支えとなった重要人物の存在を記し、読者に伝える役割をもつと結論づけた。このような工夫からも、書き手が「記録」としての意識で全ての章段を書いているわけではないこと、読者意識をもって執筆していることがいえると考えられる。第三章では「末尾」部分に関する考察を行った。章段の終わり部分に多く見られる「言葉」の引用部分に続く「付加部分」を「言い訳」と捉える従来の論に対し、第一二七段の「見苦しきわれぼめどもをかし」に関しては、章段内容全体を「肯定」する書き手の方向づけであると結論づけた。清少納言によって書き記すこと自体が（自慢になってしまうために）見苦しく思える話であっても、出来事そのものが〈定子にとって〉喜ばしいものであることを他の女房の誰より理解しているからこそ、定子後宮に仕える女房としての職務を果たすことが出来た喜びを記して伝えたい、という思いが「付加部分」から読み取れると考えた。

以上のように、『枕草子』日記的章段は、その日に起こった事実の記録にとどまらず、「和歌」「時間」「場所」などの題材を選定して配置し、冒頭や末尾部分の細部にまで意図的に表現を選んで用いるなど、思いや主題を読者に伝えるために、表現の仕方に慎重かつ細やかな配慮や工夫がなされているといえる。

太宰治が描く女性主人公の物語を通しての成長とその意義

卒業論文では太宰治の「燈籠」「皮膚と心」「ヴィヨンの妻」の3作品を取り上げ、それぞれの女性の変化やその共通点に着目し、そこから太宰治が社会に訴えていたことを考察することで男性である太宰治が女性主人公作品を蹴き続けた意義を明らかにすることを目的とした。

本論の第一節では「燈籠」の主人公「さき子」の世間と家族の認識の変化の過程によって三部構成になっていると考え、各部における変化から太宰治が「さき子」を通して伝えたかったことを考察した。「さき子」の変化の様子から、太宰は「さき子」を通して「家族」の大切さ、「世間」に左右されずに関わっていくことの難しさとそれが出来る人間の強さを伝えたかったのではないかと考えた。

第二節では「皮膚と心」の作品中の「人が変わった」という言葉に着目し、「私」がそれぞれどう変わったのかを読み取ることで「私」を通して太宰が伝えたかったことを考察した。女性だからこそ吹き出物を重く捉え、刻一刻と感情や考えが変化する女性だからこそ、最終的に心の成長へとつなげることができたと考え、「日常の中の成長」を描くために太宰は女性を主人公としてこの作品を書いたのでは無いかと考えた。

第三節では「ヴィヨンの妻」を「私」の考え方、言動の変化によって三部構成と捉え、各部における「私」の変化の過程とその意味を考察することで作品を通して太宰が伝えたかったことを考察した。第一部から第三部にかけての「私」の気持ちや言動の変化(成長)、「私」の立場の変化の過程は、「私」の戦後という時代を生きていく人間としての成長、自立した女性への成長を描く事による夫の最初から最後まで変わらず、「私」の変化にも気がつかない幼稚さとしょしょうもなさを実感させる効果があると考えた。

3作品の共通点は、女性の精神面での成長が描かれ、他人に依存していた女性が自立しようとしている物語である点だ。現代社会よりも男性の影に女性が隠れ、関わる世間や社会が狭かったからこそ、その中で自分の力で道を切り開いて成長していこうという姿が美しいと考え、それを男女問わず読者に伝えるために太宰は10作品以上女性語り作品を生み出したのではないだろうか。

本論文では3つの作品に絞って考えたため、全ての女性主人公を対象に考えたら異なる結論が出たり、今回の結論をより強める結果になったりする可能性がある。そのため、太宰治の女性語り作品に関する多くの先行研究をより深く理解し、現代の男女平等になりつつある社会だからこそ考えられる立場で研究をすることが今後重要なのではないかと考える。